

	<h1 style="font-size: 2em; margin: 0;">JAAGA だより</h1> <p style="margin: 0;">日米エアフォース友好協会 Japan-America Air Force Goodwill Association</p>	<p>発行：日米エアフォース友好協会 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町9番7号 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F</p> <p>編集：JAAGA 事務局 印刷：東伸社 ホームページ：http://www.jaaga.jp/</p>
---	---	--

令和 6 年度 JAAGA 総会開催

JAAGA Annual Convention held on May 14 2024



JAAGA President Marumo delivers an opening address

令和 6 年度 JAAGA 総会は 5 月 14 日（火）15 時より金古理事の司会により開催された。審議に先立ち、令和 5 年度にご逝去された竹内由則氏（正会員・広報理事）、松岡謙一氏（個人賛助会員）のご冥福を祈り、全員で黙祷を捧げた。

続いて丸茂吉成会長より「JAAGA は設立から今年で 28 年、再来年には 30 周年を迎える。会員数も 400 名以上となり活発な活動を行っている。本会設立の趣旨と諸先輩方が継続してきた事業を見習いつつ、時勢の変化とともに見直すべきことは見直していきたい」旨の挨拶があった。

本総会は、正会員総数 257 名（令和 6 年 5 月 14 日現在）の内、本総会出席者 71 名、委任状提出者 152 名の計 223

名をもって会則の規定により総会成立要件を満たす旨の報告があり、議案審議、報告事項の順に審議等が進められた。

議案審議は、会則により丸茂会長が議長を務め、第 1 号議案「令和 5 年度事業報告」、第 2 号議案「令和 5 年度収支決算報告及び会計監査報告」、第 3 号議案「令和 6 年度事業計画」、第 4 号議案「令和 6 年度予算案」及び第 5 号議案「役員を選任」の 5 つの議案について、各々担当理事による説明ののち質疑応答が行われた。第 4 号議案では、これまで年度 2 回実施していた SPORTEX を予算の制約から年度 1 回とする旨の説明があった。第 5 号議案では、会長は丸茂氏が継続、副会長には荒木淳一氏、前原弘昭氏、井筒俊司氏、監事には小野賀三氏、深澤英一郎氏がそれぞれ選任された。質疑応答で議論された学生の米軍との交流機会の作為、海兵隊との関係及び SPORTEX 支援のあり方については今後の検討課題とされた。第 3 号議案の事業計画及び第 4 号議案の予算案に嘉手納におけるスペシャルオリンピックスを加えたほか、全議案について提示案のとおり承認された。

次に報告事項として、前原理事長から役員会で選任された新理事（西谷浩一氏、上境賢己氏、高橋秀雄氏の計 3 名）の就任について報告された。最後に、退任及び新任役員の紹介が行われ、総会が締めくくられた。（菅原理事記）

～ だより 第 66 号 目次 ～

J A A G A 総会開催・・・・・・・・・・・・・1	航空自衛隊 コーナー・・・・・・・・・・・・・28
令和 6 年度 J A A G A 講演会・・・・・・・・・・・・・2	J A A G A だより今昔物語・・・・・・・・・・・・・29
令和 6 年度 J A A G A 懇親会・・・・・・・・・・・・・4	米空軍 コーナー・・・・・・・・・・・・・30
空幕部長等講演及び J A A G A 訪米成果報告会・・6	マルティネス名誉会員来日・・・・・・・・・・・・・31
令和 5 年度日米優秀隊員表彰・・・・・・・・・・・・・9	ホリデーレセプションに参加・・・・・・・・・・・・・32
コープ・ノース 24 参加隊員を激励・・・・・・・・・・・・・12	新人会員紹介・・・・・・・・・・・・・33
J A A G A 会長、P A C A F 司令官交代式参加・・・・・・・・14	令和 6 年度 J A A G A 事業計画、役員、退任役員・・・・34
日米相互特技訓練を激励支援・・・・・・・・・・・・・16	賛助会員の皆様へ・・・・・・・・・・・・・35
令和 5 年度 J A A G A 嘉手納基地等研修・・・・・・・・・・16	投稿募集のご案内・・・・・・・・・・・・・35
日本刀「冬廣」ーキセキの物語の続き・・・・・・・・・・22	J A A G A グッズの紹介・・・・・・・・・・・・・35
SPORTEX '23- B・・・・・・・・・・・・・24	会員募集・・・・・・・・・・・・・36
航空宇宙群紹介コーナー・・・・・・・・・・・・・26	編集後記・・・・・・・・・・・・・36
米空軍将校航空自衛隊勤務だより・・・・・・・・・・・・・27	

令和 6 年度 JAAGA 講演会

JAAGA Lecture held on May 14 2024

今回の JAAGA 主催講演会は在日米国大使館の武官アンディー・C・リー大佐が「責任地域における現在の情勢及び米空軍／宇宙軍の二国間協力における今後の道」との演題で実施された。初めに、司会の上ノ谷理事から、リー大佐は、C-17 での 1,074 時間の戦闘時間を含む、4,000 時間以上の飛行時間を持つコマンドパイロットであり、2001 年に米国空軍士官学校卒業後、2012 年 DLI にて日本語習得、2015 年には、米国海軍大学院で国家安全保障の修士号を取得し、2015 年 安全保障協力室 AF プログラムディレクターとして台湾に勤務、横田基地に所在する国防脅威削減局日本支部のチーフを経て、2023 年 8 月に駐日米国空軍武官に就任したことが紹介された。

リー大佐は、講演の冒頭、JAAGA 会員に講演できることを大変光栄に思うと述べられとともに、先日の日米首脳による声明にあるように、新たな高みに達したとして、①現在の安全保障環境、②日本政府、自衛隊の安全保障関連文書及びアメリカの反応、③責任地域のリーダーシップによる訪問、④太平洋における空軍の活動、⑤今後の展望(てんぼう)：宇宙協力について日本語と英語で述べられた。終盤には、JAAGA を「日米エア・スペースフォース友好協会」に名称変更してはとの提案に会場は大いに沸く場面もあった。この後、参加者からの質問に丁寧な日本語での回答を終えた後、リー大佐への万雷の拍手をもって、講演は終了した。これを受け、講演終了後には会長から、名称変更の提案は持ち帰って検討するとの発言もあり、再び会場が盛り上がった。(浅井理事記)

「責任地域における現在の状況及び米空軍、宇宙軍の二国間協力における今後の道」

日米エアフォース友交協会 (JAAGA) の皆様、初めまして。

私はアンディー・リー (Col Andy C. Lee) と申します。米大使館の空軍武官です。本日は第 5 空軍司令官リッキー・ラップ中將に代わり JAAGA の素晴ら



Guest speaker Col Lee gives a lecture

しい会員の皆様にお話をするのができ大変光栄です。また、空軍の一員として日米同盟に直接貢献できることも光栄に思います。

私は昨年 8 月に空軍武官として着任しました。以前にも、様々な役割で日本に何度か来たことがあります。初めて日本に来たのは 24 年前、空軍士官学校の士官候補生として研修ツアーに参加しました。

70 年におよぶ日米同盟は常に強固なものであり、一方、この同盟は、4 月 10 日の日米両首脳による声明にもあるように、新たな高みに達したように見えます。この関係の一部であることにとても興奮しています。1996 年に設立された JAAGA は「航空自衛隊及び米空軍の強固な絆は国家の安全保障にとって不可欠である」という信念に基づいています。現在の安全保障環境は、過去にも増して日米両国間の絆を強めるものであり、航空自衛隊及び米空軍の関係も例外ではありません。

本日は次の 5 つのトピックについて お話したいと思います。

①現在の安全保障環境、②日本政府、自衛隊の安全保障関連文書及びアメリカの反応、③責任地域のリーダーシップによる訪問、④太平洋における空軍の活動、⑤今後の展望(てんぼう)：宇宙協力

(1) 現在の安全保障環境

安全保障環境はますます厳しくなっています。

インド・太平洋正面では、中国が積極的な活動を続けており、アジア諸国への日常的な侵入や海底資源の開発危険度が増している。アメリカ及び同盟国の航空機に対する妨害、台湾に対する威圧的な政策など、自由で開かれたインド太平洋の理念を危険にさらしています。欧州・大西洋正面では、ロシアによるウクライナ侵攻から 2 年以上が経過し、難民危機や何万人もの死者、世界の秩序に関する根本的な知識の変化が起こっています。

その一方で、北朝鮮は核兵器の開発、実験及び人工衛星の打ち上げを続けており、金正恩体制に対するいかなる脅威にも先制攻撃として核の使用を検討すると明言しています。安全保障上の脅威の層が追加されているのです。中国、ロシア、北朝鮮が、インド太平洋地域及び海外における二国間及び多国間関係を阻止したいという願望に駆られて防衛及び経済協力を強めているのを、私たちは目の当たりにしてきました。北朝鮮とロシアの防衛関係は、2023 年春以来、軍需品や食料交換を通じて量と範囲が着実に拡大しており、ハイレベル外交訪問の増加を通じてその範囲も拡大しています。この新たな自信が北朝鮮の度重なる地域挑発を強化しています。

一方、ウクライナ侵攻に対する制裁の影響で、ロシアと中国の経済的なつながりは深まり、エネルギー関連の貿易が増加しています。更に、日本周辺における海軍及び爆撃機による合同パトロールに見られるように、中露軍事演習の頻度、規模、複雑さは増大しています。今は世界、特にインド太平洋においてダイナミックな時代です。日本は、中国だけでなくロシア及び北朝鮮との競争の最前線にいます。日本は、域内及び世界の安全保障におけるアメリカの重要な同盟国であり、法に基づく国際秩序を掲げる自由で開かれたインド太平洋に貢献しています。このような安全保障上の脅威に直面し、日米両国はこれらの脅威に対抗するため、その同盟関係を今まで以上に強化しなければならぬと認識しています。日本はインド太平洋における民主主義の砦の役割を果たしており、法に基づく秩序を維持するよう同志国に力を与えています。



Col Lee explains using publication

(2) 日本政府 / 自衛隊の安全保障関連文書及びアメリカの反応

日米両国が直面する安全保障上の脅威のため、両国の国益及び戦略はひとつにまとまって来ています。

両国の国家防衛戦略は、ますます複雑化する世界の安全保障環境及び国際社会におけるパワーバランスの転換のための努力を認識しています。これらの脅威に直面し、日本は安全保障分野においてかつてないスピードで動いています。日本は、防衛費の倍増、反撃/スタンドオフ能力の取得、宇宙作戦及びサイバーの増加、統合防空ミサイル防衛能力及び指揮統制体制などを盛り込んだ安全保障関連三文書を発表しました。来春、日本は、指揮統制及びその権限を強化するため、統合作戦司令部 (J-JOCC と呼ばれる) を立ち上げます。その概念は演習キーン・エッジ 24 で実証されており、日米同盟にどのような影響を与えるか、現在評価しています。

(3) 責任地域のリーダーシップによる訪問

この2~3か月の間に在日米軍及び第5空軍は、責任地域における部隊の即応性及び課題について意欲的に理解しようとしている新旧リーダーシップなど数名の高官による訪問を受けました。空軍長官、空軍参謀総長、空軍最先任、及び上級リーダーたちは、残存性及び利用可能な戦闘力を増大させるためのコンセプト、(ACE と呼ばれる) の確立を達成した進歩を直接目の当たりにし、指揮統制の変更に

ついて議論し、アクセス及び防衛力で直面する課題を明らかにしました。先月、コロラド・スプリング及び東京において、注目の宇宙分野のリーダーたちによる一連のミーティングが開催され、直接目にすることができました。

コロラド州では航空自衛隊が宇宙シンポジウム、宇宙参謀長等会同、将官級会議の CSpO に参加しました。CSpO は統合宇宙作戦、英語で Combined Space Operation と呼ばれます。補足ですが、CSpO への日本参加をアメリカは後押ししました。CSpO から、日本は宇宙に関する同志国 10 か国と人脈を構築することができました。日本側からは航空幕僚長及び戦略企画参事官が参加しました。

アメリカ側からは国防次官補 (宇宙政策担当)、宇宙作戦部長、宇宙コマンド司令官も参加しました。日本では、宇宙コマンド司令官が防衛大臣、統合幕僚長、航空幕僚長、宇宙開発戦略推進事務局長とハイレベルの協議を行いました。

また、日本の宇宙産業との日米パートナーシップを目の当たりにし、日本の軍事的宇宙安全保障において重要な役割を担う宇宙作戦群を訪問しました。補足ですが、宇宙コマンド司令官は、日米関係の重要性を示すために最初の外国訪問先として日本を選びました。

(4) 太平洋における空軍の活動

在日米軍ではこの夏、大勢の異動が見込まれています。米空軍は引き続き、様々な機会を通じて日本のパートナーと共に同盟の強化に取り組んでいきます。その例は以下のとおりです。

例えば、日本の反撃能力の取得を促進します。ハワイ及び航空総隊 (ADC と呼ばれる) 間の AOC 同士の機能及びプロセスの調整します。日米共同情報分析組織 (BIAC と呼ばれる) や戦術分析作業グループなどを通じて自衛隊全体の情報共有を強化します。領域横断 (クロスドメイン) の二国間及び多国間通信のためのシステムを開発及び投資します。作戦権限及び指揮統制体制を検討します。

一方、キーン・エッジ (KE)、キーン・ソード (KS)、ヴァリアント・シールド (VS)、ノーザン・エッジといった演習を活用します。キーン・エッジ 24 は兵器システム、戦域内空輸及び指揮統制の態勢及び相互運用性を高めるための構成要素としての役割を果たしました。この演習は、平時から有事へのシームレスな移行を可能にし、域内の敵に対して私たちの部隊は訓練だけでなく実戦においても効果的であると強調します。



Col Lee speaks in fluent Japanese

米空軍は引き続き、実務者から将官レベルまで統合及

び多国間の機能、演習、訓練への日本の参加拡大をサポートするリンクとしての役割を果たして行きます。

(5) 今後の展望：宇宙協力

先月、私は 航空自衛隊創設 70 周年の記念式典に出席しました。テーマは「大空とその先へ」でした。このテーマは、航空自衛隊が特に力を入れている「宇宙」をよく表しています。



Participants ask questions

国々は常に新しい高地を獲得することを重視して来ました。最も高い地形の獲得から空への飛行まで、今日の高地にあたるのは宇宙です。私たちの衛星は、私たちの国に通信、GPS データ、ISR（情報、監視、偵察）を提供しています。これらの要素はすべて、近代戦を遂行していくうえで必要不可欠なものです。私たちに危害を加えようとしている国々は、私たちが近代戦において、宇宙に依存していることを十分認識しています。従って、日米同盟は互いの強みを補完し、脆弱性を軽減するため、互いのリソースをひとつにまとめ続けなくてはなりません。宇宙領域のリスクには、軍事衛星からの直接攻撃、電子戦や指向性エネルギー兵器、敵の衛星からの脅威、サイバー攻撃のような地上サイトの攻撃による私たちの衛星コンステレーションへの攻撃が含まれます。日米両国はサイバー耐性を強化するため、緊密に連携しなければなりません。サイバー攻撃は台湾有事の際、間違いなく最初に行われるでしょう。それ

には三つ理由があり①検出が困難である②運用コストが安い③私たちのシステムが戦場に配備されることさえ阻止する能力を持っています。

最後に、2024 年 4 月 10 日に発表された日米首脳共同声明では、「人的交流は、将来の日米関係を担う人材を育成する最も効果的な方法である」と述べられています。JAGGA は人的交流の完璧な例だと思います。

先に述べたように、航空自衛隊創設 70 周年記念のテーマは「大空とその先へ」であり、宇宙がますます重要な役割を担うことを示しています。そこで僭越ながら JAAGA 会員の皆様にご提案がございます。航空自衛隊のテーマに合わせて「日米エア・スペースフォース友好協会」という名称に変更してはいかがでしょうか。日本の宇宙作戦群（SOG と呼ばれる）は既にアメリカの宇宙作戦と緊密に交流しており、彼らの貢献はますます重要になって行くでしょう。これらの部隊は JAAGA にとって素晴らしい補強となるに存じます。改めて、本日は JAAGA の皆様にお話しすることができて光栄です。ご清聴いただき、ありがとうございます。



Col Lee replies in fluent Japanese

令和 6 年度 JAAGA 懇親会

JAAGA Annual Reception held on May 14 2024

総会及び講演会の後 18 時 15 分より、三宅大臣政務官、中谷衆議院議員、佐藤正久参議院議員、内倉航空幕僚長、尾崎情報本部長、小笠原航空幕僚副長、後藤装備官、谷嶋統幕学校長、船倉空自幹部学校長、レッシュ第 5 空軍幕僚長、リー駐日米大使館付空軍武官ほかの来賓をお迎えし、川波理事の司会進行により盛大に懇親会が開催された。

日米国歌の吹奏に続き丸茂会長より「最近の紛争や対立といった国際情勢からの気づきは如何なる国も同盟国や友好国との協力関係がとても重要ということ。在日米軍の指揮統制機能強化や常設統合司令部設立等

を通じ、日米の協力関係は一層強化されるものと信じている。」旨の挨拶の後、令和 5 年度に表彰を受けた日米優秀隊員が壇上で紹介された。

続いて行われた来賓祝辞の要旨は次のとおり：

三宅大臣政務官：昨日与那国島の駐屯地を訪れた。15 世紀頃に同島を統治したサンアイ・イソバという女傑の伝説があり、多くの敵から島を守った彼女は周辺の島々に自分の存在を知らしめる大きな草鞋を作り海に流したそうで、これは抑止力そのもの。戦略 3 文書と防衛予算により必要な防衛力を整備し日本を守る覚悟を目に見える形で示して参りたい。

内倉航空幕僚長：

宇宙やサイバースpaceの静かな戦いにより戦闘機が飛び立つ前に灰になってしまふ、10年前は軍事小説の世界がいまや現実である。自分もこれ



President Marumo gives guests and participants a warm greeting

まで様々な米軍幹部と意見交換をしてきたが、横田では鈴木司令官率いる航空総隊が、府中では森田司令官率いる航空支援集団が丁寧に日米同盟の強化に尽力している。米国留学時に習った『平時に汗を流せば流すほど有事に流す血を減らすことが出来る。』という格言を紹介したい。

レッシュ第5空軍幕僚長：現在アジア太平洋地域では我々を脅かす存在があり、防衛分野のターニング・ポイントに立っている。このような機会を通じ、日米同盟は相互理解を含め更に強化される必要がある。

中谷衆議院議員：約20年前の防衛庁長官時に当時の竹河内統幕議長や遠竹空幕長と「そろそろ統合運用をやろう。」と協議していたが、その後統幕ができ、来年は常設統合司令部ができる。米軍も在日米軍司令部を改編するとのことで、日米の統合機能が強化されることを期待している。

佐藤参議院議員：最近最も注力しているのは隊員の確保と処遇改善である。令和5年度の空自における一般曹候補生及び自衛官候補生の入隊者はたった2300名であり、その約4分の1の580名が女性である。その女性も令和4年度と比べて140人少ない。当に人的有事であり、しっかりと尽力して参りたい。

その後の来賓紹介、祝電披露に続く約1時間にわたる懇談では、各テーブルにおいて美味しい食事と飲み物を楽しみつつ、和やかかつ賑やかに話が弾んでいる様子であった。

最後に前原理事長の閉会の挨拶及び納杯をもって盛会のうちにお開きとなった。

(菅原理事記)



Col Daniel Roesch, Chief of Staff, the Fifth Air Force, delivers a congratulatory speech about the need for further strengthening of the alliance



Distinguished guests at the banquet room



President Marumo brings on the brilliant soldiers of Japan and U.S. awarded in 2023



President Marumo brings on the brilliant soldiers of Japan and U.S. awarded in 2023



House of Representatives member NAKATANI GEN and House of Councilors member SATOH MASAHIKA deliver congratulatory messages

空幕部長等講演会及び JAAGA 訪米成果報告会

Lecture for JAAGA members on February 26 2024

令和 6 年 2 月 26 日 (月)、グランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」において、航空幕僚監部人事教育部長白井亮次空将補を講師に迎え「航空自衛隊の人的基盤強化戦略を考える」と題して講演会 (1400 ~ 1530) が行われた。また、講演に先んじて前号「JAAGA だより 65 号」に掲載された「令和 5 年度 (2023) つばさ会 / J A A G A 訪米団成果報告」(1310 ~ 1350) について引田理事から口頭で細部説明が実施された。参加者は、JAAGA 会員 68 名 (正会員 51 名 < 役員 8 名含む >、個人・団体賛助会員 6 名、法人賛助会員 8 社 11 名) であった。

(池田理事記)

講演「航空自衛隊の人的基盤強化戦略を考える」

航空幕僚監部人事教育部長 空将補 白井 亮次



白井空将補プロフィール
防大 38 期 職種：飛行
主要経歴
警戒航空団司令、飛行開発実験団司令、航空総隊防衛部長、空幕人事教育部長 (令和 5 年 8 月～)

最近の新聞記事によると「15 歳から 64 歳の生産年齢人口が 2040 年に 8 割になる」、「厚生労働省は 2040 年に 69 万人の介護職員が不足すると試算している」など、将来の労働力不足は明らかである。このため人材こそが価値を生み出す源泉と捉える「人的資本経営」が日本でも広がりつつあり、働き方改革やジョブ型によるキャリア形成など、人材育成の有り様が大きく変化している。

米国でも軍人志願者数の減少が国家安全保障への脅威、との記事が昨年 7 月に「Japan Times」に掲載され、全て志願制の米軍を将来にわたり維持することに懸念があるとのこと。国への奉仕を賛美する社会の風潮が薄れたことが志願者減少の大きな要因としている。

昨年 10 月には隊員不足で自衛隊が弱体化する、との報道もあった。その理由の一つとして、自衛隊員であることが誇りとならないからと、インタビューに答える現役自衛官がいたことは残念に思う。

こうした中、我が国周辺の安全保障環境は厳しさを増す一方、ウクライナや中東も複雑化の一途であり、多発する自然災害への対応等もあって国民から防衛省・自衛隊への期待の大きさを実感しつつも、現場の隊員の負荷が増大していることも事実である。

従って、防衛省・自衛隊の人的基盤の強化は組織の運命を決する重大な課題であり、この課題の克服には戦略的思考に基づく各種施策の推進が不可欠と認識している。

1 空軍の特質

高いスキルを持つスペシャリスト集団である空軍組織を維持するためには「ある種の統率」が必要だが、最も分かりやすい取り組みが、空軍人としての心構えを文章で明示し、スローガンとして定着させ、同じ組織の仲間としての連帯感を醸成する方法である。その一例が米空軍のコア・バリュー、すなわち「Integrity First」誠実第一、「Service Before Self」献身、「Excellence In All We Do」あらゆる面での卓越性、の 3 点である。このコア・バリューは組織文化を定着させ、組織全体の行動規範として判断に迷った際の指針として活用されることを企図しており、連帯感による離職防止や新規採用者の募集においても組織文化や組織のカラーの宣伝に一役買っている面もある。

米空軍のコア・バリューに近いものとして空自のエアマンシップがある。「服務の本旨」及び「自衛官の心構え」を基礎として空自隊員に求められる資質、能力、思考、行動、態度、躰に関する精神的基盤であり、「空自魂」を中核として、「操縦者綱領」や「後方魂」等、各特技や部隊等の特性に応じた精神要素を包括したものになる。

空自隊員のあるべき姿として「行動規範」も規定されている。この行動規範は、精神を行動様式に具体化したものとして規定され、階級を問わず共通の規範が示されている。これらの精神的基盤を全隊員が確立し、長期にわたり維持されることを人事教育部長として切に願っている。

2 人的基盤強化に係る航空自衛隊の取り組み

国家安全保障戦略、国家防衛戦略など、所謂戦略 3 文書を受け、現在防衛省・自衛隊として取り組んでいる人的基盤強化施策について説明したい。

(1) 有識者会議提言のフォローアップ

[昨年 7 月に防衛大臣に提出された「人的基盤の強化に関する有識者検討会」の報告書及びそのフォロー

アップについて説明（防衛省ホームページ参照）]

(2) 空自独自の取り組み

省統一施策のほか、現在進めている人的基盤強化の取り組みとして、リクルーターの派遣、移動広報、WEB等による募集広報等、空自でできる施策の他、地本と連携した基地見学等の受入れや、各種イベント支援、これらを通じた空自への理解の促進に努めている。

空自は男女共同参画に資する各種施策にも取り組んでおり、2015年11月、戦闘機を含む全職種において女性の配置制限を解除し、現在女性操縦者数は約20名、更に約20名が操縦課程を履修中である。また、現在空自から米国及び豪州に女性の防衛駐在官を派遣しており、現地で活躍中である。空自における女性自衛官の占める割合は約10.3%で、2030年度末までに約15%まで拡大することを目標としている。隊員の生活勤務環境の改善に関する取り組みも実施しており、老朽化した隊舎や庁舎を計画的に整備しているほか、浴場の増設、空調設備の更新、Wi-Fi整備等も実施している。また毎年1回、全隊員を対象とした空自エンゲージメント調査を実施している。隊員エンゲージメント、心理的安全性、ワーク・エンゲージメントの3指標について測定し、調査結果を基に省統一や空自業務計画には反映されていない勤務環境の改善や制度の見直しを図り、隊員個々のエンゲージメントを向上し、将来への不安を払拭するよう努めている。

3 航空自衛隊の人事教育における課題と今後の挑戦

(1) 人口減少に対する課題の克服

一般的な人事サイクルは、募集に始まり、獲得した人材を教育・訓練し、自衛隊員としての特殊能力を持つ人材を援護業務を通じ一般社会に還元する一連の流れをいう。しかしながら、人口が減少し、人々の価値観の多様化が進む日本においては、もはやこのサイクルの考え方では他省庁はもとより民間企業とも人材の取り合いとなることは明白である。取り組むべきは、「優秀な人材」を再定義し、人材に期待するものを明確にするとともに、空自こそが入隊者の期待に応えられるという期待マッチングを実現することである。加えて、空自が必要とする能力を明らかにし、能力マッチングを実現する必要もある。一般企業のインターンのような施策も必要だと思う。現在も着隊前に基地見学などの機会を通じて現場の隊員から直接仕事の説明を受ける体験型の研修も実施しているが、ボーイスカウトのようなクラブ活動的に自衛隊の仕事を体験できる枠組みを設け、採用予定者に限らず幅広い年齢層に自衛隊員を志すきっかけを与える活動が考えられる。優秀な人材を再定義する上で考慮すべきことに世代間ギャップがある。世代論でいえば私は団塊ジュニア世代にあたるが、この世代は就職前に企業の倒産やリストラを目の当たりにしたため転職

市場でも評価される個人になりたいとの意識が強く、管理職よりプロフェッショナルを目指す世代とのこと。私がお仕えてきた団塊の世代の上司は、激しい生存競争の中で勝ち残るため、What（何を）やWhy（なぜ）より、How（どうやって）に重点を置き、「考えるより、先ず動け」といった方々と言われている。しかし目まぐるしく変化する社会情勢に適応するため、今後はWhatとWhyを考えることが必要となる。地位や年収よりも自己の充実を重視するゆとり世代やZ世代の部下が多い現代では尚更だと思う。

世代間ギャップによる社会問題の一つにハラスメントの問題がある。セクハラ、パワハラをはじめ多くのハラスメントがあるが、ハラスメントは隊員の尊厳や人格を傷つけ、隊員相互の信頼関係を失墜させ精強性を揺るがす行為であり、ハラスメントが一切許容されない組織の構築は、特に人事教育を司る我々の使命であると自覚している。しかしハラスメントが怖いので何もしない、という訳にもいかない。一つのヒントは心理的安全性にあると思う。心理的安全性を

高めるとハラスメント抑制に繋がるとの見解もある。ハラスメントの定義を正しく理解し、適切なコミュニケーションを取ることが必要だと思う。次に、教育訓練について考えたい。もともと多様性が人的戦力の源である空自にとって、期別管理による年功序列型の人事管理を基本としながらも、ジョブ型的なキャリア・アップはこれまでも考えられてはきた。しかしこれからは、一部のスペシャリストにおいてはジョブ型を前提とした採用を拡充し、相応の経歴管理を行う必要がある。民間で培ったキャリアを自衛隊で活かしたいという人材がいるのと同様、自衛隊でのキャリアを民間で活かしたいと思う隊員も増えている。教育訓練においても、官民それぞれのキャリアを循環するサイクルが必要となると考えている。特に、宇宙やサイバーの要員は民間の方が技術・技能では高いレベルにあり人材も豊富であるが、官で働くメリットもあり、こうした分野に官民の人事サイクルを設けることで人材の有効的活用と効率的な人材育成が可能になると考えている。

最後に援護について。自衛隊で培われた技能・経験をもった有用な人材を社会に還元することで新たな募集に繋げることも重要であるが、継続して国の防衛に寄与したいというOB、OGにその一端を担ってもらえる枠組みを拡



Maj Gen Shirai, Director General, Personnel and Education Department, Air Staff Office, gives a lecture; “How to strengthen the human resource strategy of Koku-Jieitai

大することも必要と考えている。現在、定年再任用や元自衛官の再任用の拡充に努めており、特に操縦者の再任用では令和5年度から操縦教官としての定年再任用を開始した。今後も順次再任用ポストを拡大する計画である。

(2) レディネスの維持向上施策

隊員個々に求められる職責が拡大する状況にあって、現在の人的戦力を有効に配分しつつ、練度の向上を適切に図るための新たな教育訓練体制の導入が必要と考えている。

その検討の資として、米空軍が取り組んでいる Air Force Force Generation がある。これは高度な戦闘への即応性を向上させ、統合軍に提供できる能力を適切に準備することを目的として、Prepare, Ready, Available to Commit, Reset の態勢をローテーションで就かせるという構想である。

これまで態勢の保持、所謂レディネスは、集中的な教育

訓練と人事異動による補職教育をもって個人及び部隊の練度向上を図ってきた。しかし、人事上の余裕が極めて



減少している中、教育訓練で現業に穴が開くことは部隊として許容できなくなっている。また若者の地元定着志向も広がっている中、引越しを伴う異動を局限しつつ、分屯基地などへの配員や各種演習への準備など適時適切な人員の配置を検討する必要があると考えている。また空軍種の特質から、スペシャリスト集団に必要な「ある種の統率」及び規律を維持するため、ジョブ型人材に求める責任と権限を明確にする必要がある。特に、組織の骨幹である幹部自衛官の教育は極めて重要である。「指揮」は、任務を実行させる一連の活動である狭義の指揮、リーダーシップに相当する統御、そして管理の3つからなる。統御には模範、鼓舞、褒賞、懲罰の4つのツールしかないとも言われる。これらの組み合わせがそれぞれの指揮官の個性となると思うが、その個性の管理が人事には必要となると思う。また、管理は勿論、狭義の指揮においても、人工知能の導入によって代替される部分が広がることが予期される。よって、将来の幹部自衛官に求められる資質には、自ら判断し意思決定するシステムの中に組み込まれることなく、システムを俯瞰し課題を見つけ対処できる能力が重視されることになると思う。人的基盤強化を考える上で参考とすべき3つの法則について紹介したい。1つ目は、パーキンソンの法則。

英国の歴史学者シ ril・パーキンソン氏が提唱した法則で、「役人はライバルではなく部下が増えることを望む」、「役人は相互に仕事を作り合う」というもので、官僚制内部の総職員数は、成すべき仕事の量の増減に関係なく増加するという法則である。

2つ目はピーターの法則。米国の教育学者ローレンス・

ピーター氏が提唱した法則で「能力主義の階層社会では、人間は能力の極限まで出世する。従って有能な平構成員は無能の中間管理職になる」というもの。

3つ目はパレートの法則。イタリアの経済学者ヴィルフレド・パレートが提唱した法則で、組織全体の2割ほどの要人が大部分の利益をもたらし、その2割が間引かれると残り8割中の2割がまた多くの利益をもたらさなくなるという働きアリの法則として知られる。

これら3つの法則を念頭に、要員の配員は適材適所、無駄に人を増やさず、管理職の選考は実績ではなく将来性を重視し、組織の2割は遊兵化、組織の上位2割が有効に機能するといった現実を直視しながら、人的基盤強化のための戦略を練る必要がある。

(3) 次世代を担う航空自衛隊員の人材育成

最後に、空自に必要な人材に関して私見の一端を説明したい。キーワードは「志」、「忠」、「怨(じょ)」の3つの心である。「志」とは、高い志をもった人材。日本では、今ここに全力投球することで天命によって運ばれていくといった、自分を超越したもののために尽くすことが美德とされている。自衛隊員にはこの受け入れるという絶対的な受動の中に、受けて立つという究極の能動を持つ、志高い人材が必要だと思っている。次に「忠」、忠実に任務を遂行できる人材である。有事はもちろん災害発生時においても職責を果たすことが期待される自衛隊員にとって、ストレスフルな環境に自ら志願して飛び込むためにも組織への高い忠誠が必要になる。国家国民に対しては勿論、組織に対しても忠実であることは変えてはならないと思っている。3つ目の「怨」は、論語の「我の欲せざるところ、人に施すことなかれ」という孔子の教え。空自は約70の特技からなる多様性が力の源の組織であるから、個々の能力の結集が必要であり、総合力発揮には人の和が重要である。信頼関係を失墜させるハラスメントなどはもってのほか、自分が嫌なことは他人には絶対にしない人材が求められる。実はこの3つの心は、私が飛行隊長として初めて責任ある指揮官職に就いた時に掲げた自分自身のモットーであり、これからも続けてまいりたいと思っている。

本日は人事教育部長としての野心的目標を述べたが、私も15歳で空自を志し、F-15の操縦者として飛行隊長、警戒航空団の初代団司令、テストパイロット教育でお世話になった飛行開発実験団の司令、そして前職は全国の戦闘機部隊、高射部隊の運用に責任を有する航空総隊司令部防衛部長として勤務させて頂き、国防の最前線を経験してきた。これからは、いかに優秀な後輩を育成して行くかが私自身の野心的目標である。これまで、私自身が得た教訓は余すことなく後進に伝え、変化を恐れず時代に適応する航空自衛隊を築ける人材の確保と育成に尽力して参りたい。

令和 5 年度日米優秀隊員表彰

JAAGA AWARD for Koku-Jieitai & USAF Brilliant Soldier in FY2023

令和 6 年 2 月下旬～3 月中旬にかけて、令和 5 年度 JAAGA 日米隊員表彰式が、三沢、那覇及び横田の各基地において行われた。本表彰行事は、空自と米空軍の友好親善と相互理解に貢献した隊員を表彰することを目的として平成 10 年度から行われているものであり、今回が 26 回目となる。これまでの被表彰者数は総計 189 名（空自 111 名、米空軍 78 名）を数えた。今年度は、コロナ禍以降 4 年ぶりに各基地で祝賀会食を含む全行程の行事を執り行うことができた。表彰式における丸茂会長からの挨拶では、能登半島地震での災害派遣を継続する一方、国際環境が急激に厳しさを増し日米同盟の重要性が益々重要になる中で、黙々と任務を果たしている日米両部隊への敬意と感謝、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に開催各基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。（深瀬理事記）

三沢地区表彰式

Misawa area (Misawa AB)

2 月 28 日（水）、令和 5 年度三沢地区 JAAGA 表彰行事が三沢基地米空軍ミサワクラブ（NCO クラブ）において実施された。表彰行事は、主催者となる丸茂会長、池添三沢支部長、山本三沢支部事務局長をはじめ JAAGA メンバー 5 名のほか、航空自衛隊から北部航空方面隊司令官 亀岡弘空将、第 3 航空団司令兼三沢基地司令 大嶋善勝空将補、米空軍から第 35 戦闘航空団司令官 マイケル・リチャード大佐（Col Michael Richard）、第 35 戦闘航空団先任下士官 シュロニカ・ブランバーク最先任上級曹長（CMSgt Cheronica Blandburg）をはじめ日米双方約 50 名が出席された。また、三沢市防衛協会会長 相場 博氏はじめ三沢基地周辺協力団体の皆様のご臨席を賜り、総勢約 60 名が参加する盛大な式典となった。今年度の米空軍側被表彰者は、第 35 戦闘航空団第 35 作戦群第 610 航空管制飛行隊のサミュエル・テイラー大尉（Capt Samuel G. Taylor）であり、日米共同統合演習「キーン・ソード」の第 35 戦闘航空団全体会議の統合要員を受け入れての準備に尽力するとともに、日米の合同チームを率いて三沢基地航空祭を運営するなどの功績が高く評価されての受賞となった。また、航空自衛隊側被表彰者は、偵察航空隊隊本部監理班 坂本 崇 2 等空曹であり、米空軍と航空自衛隊三沢基地共同での児童養護施設への物品寄付活動に尽力するとともに、スペシャルオリンピックにおける航空自衛隊和太鼓チームの参加を仲介する等の功績が高く評価されての受賞となった。

表彰式は、北部航空音楽隊による日米両国歌の演奏から始まり、丸茂会長から冒頭の挨拶に続いて日米の被表彰者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。来賓祝辞においては、大嶋基地司令から、被表彰者に対するお祝いと感謝の言葉とともに、「三沢基地は日米

の部隊と一緒に所在する得難い環境にある。今回表彰されたお二人を模範とし、今後もより一層強固な友情を築いて参りたい」旨の決意が述べられた。また、リチャード司令官からは、被表彰者の活躍を讃えるとともに今後とも日米友好に尽力されることを期待する旨の発言があり、JAAGA が本表彰行事の他、スペシャルオリンピックをはじめ日米の様々な活動を支援していることに対し感謝の意が述べられた。

祝賀会食においては、三沢つばさ会会長 山本方之氏の開会のご発声で和やかな食事が始まり、三沢基地における活発な日米交流行事の話題などで会話が盛り上がった。会食の終盤には日米の被表彰者から挨拶があり、緊張した面持ちで、今回の受賞を光栄に思うこと、また、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も日米の友好関係強化につながる活動を続けていきたいとの抱負が述べられた。

会食の最後は、JAAGA 三沢支部長 池添孝史氏による英語のスピーチで締めくくられ、すべての行事が盛会のうちに終了した。（島津理事記）

関東地区表彰式

Kanto area (Yokota AB)

3 月 15 日（金）、令和 5 年度関東地区 JAAGA 表彰行事が空自横田基地会議室において実施された。主催者である丸茂会長、JAAGA 理事 3 名のほか、航空自衛隊から横田基地司令 石井浩之 1 等空佐、航空気象群司令 金野浩子 1 等空佐はじめ約 30 名が、米空軍からは第 374 空輸航空団司令官 アンドリュー L. ラダン大佐（Col Andrew L. Roddan）、第 374 空輸航空団 法務部長 リチャード J. シュライダー中佐（LtCol Richard J. Schrider）が参加し、総勢約 40 名で執り行われた。

今年度の米空軍側の被表彰者は、第 374 空輸航空団のナサニエル L. フリーマン大尉 (Capt Nathaniel L. Freeman) であり、横田基地 CGOC (Company Grade Officer's Council) 企画委員会の連絡幹部として空自幹部や事務官を招聘した意見交換の場を恒常化させるなど、日米交流の促進に寄与した功績が高く評価されての受賞となった。

また航空自衛隊側被表彰者は、横田基地から横田気象隊准曹士先任 山下雄一郎准空尉、府中基地から宇宙作戦群佐藤章太郎 1 等空曹、入間基地から第 2 輸送航空隊 寺島幸男 2 等空曹の 3 名であった。山下准尉は、基地准曹会長としてスペシャルオリンピックなどに参加するほか、横田気象隊准曹士先任として米空軍のカウンターパートとイベントを通じた交流を図るなどの功績が、佐藤 1 曹は、日米最先任等会同や米宇宙軍コマンドーの来訪時などに日米交流の深化に寄与するとともに日米友好祭において有効な広報活動を行うなどの功績が、寺島 2 曹は、フロイトバイトレースや関東スペシャルオリンピクスなどへの参加を通じて日米下士官相互の協力関係醸成に寄与するなどの功績が、それぞれ高く評価されての受賞となった。

表彰式は日米両国国家吹奏から開始され、終始、厳かな雰囲気の中で進められた。

丸茂会長からは、冒頭の挨拶に続いて日米の被表彰者それぞれに表彰状と記念楯が授与され、その功績が称えられた。来賓祝辞においては、石井基地司令から「横田基地に部隊が移動して間もなく 1 2 年。時を重ねるごとに日米の関係は深くなり、絆はますます強くなった。」という認識とともに、日米の関係強化に貢献した受賞者たちへの賛辞が述べられた。また、ラダン司令官からは、受賞者の功績について「インド太平洋地域を守る為に他に類を見ない重要な役割を担っている」との称賛とともに、表彰式に関して「このような素晴らしい人材を祝うために参加していただいた皆様にも深謝する」との謝意が述べられた。表彰式後は将官宿舎レセプションルームにおいて祝賀会食が行われた。表彰式とは異なり、和やかな雰囲気の中、横田基地隊員が真心を込めて作ってくださった「横田カレー」に舌鼓を打っての懇談となった。横田基地協力会 専務理事 森田賢一様からの祝辞で開始され、懇談中には受賞者から一言ずつコメントがあり、受賞の感激と支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、今後の抱負などが述べられた。祝賀会食の締めとして横田基地 OB 会 会長 日吉章夫様から受賞者を改めてお祝いする心温まるお言葉を頂戴し、表彰行事は終了した。(三谷理事記)



沖縄地区表彰式

Okinawa area (Naha AB)

3 月 14 日 (木)、令和 5 年度沖縄地区 JAAGA 表彰行事が航空自衛隊那覇基地合同庁舎 3 階エントランス・ホールで実施された。表彰行事は、主催者たる JAAGA 本部から丸茂会長、荒木文博理事、JAAGA 沖縄支部より丸野支部長をはじめとする賛助会員等 3 名のほか、航空自衛隊から南西航空方面隊副司令官 中島隆幸空将補、第 9 航空団司令兼那覇基地司令 鈴木繁直空将補、嘉手納基地からは、第 18 航空団医療群司令官 ジョン・P・マクファーレン空軍大佐 (Col John P. McFarlane) をはじめ日米双方約 40 名にご臨席いただいた。

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、第 9 航空団基地業務群管理隊 河野聡 1 等空曹であり、米空軍第 733 航空機動中隊との交流を進化させるとともに、特に「レゾリュート・ドラゴン」演習において関係部隊との物資輸送支援の調整を図り、米軍部隊との信頼関係の構築に尽力するなどの功績が高く評価されての受賞となった。また、米空軍側被表彰者は、第 18 航空団第 18 医療群 デイヴィット・J・ガルシア 1 等軍曹 (MSgt David J. Garcia, 18th Medical Group, 18th Wing, Kadena Air Base) であり、緊急事態において重要となる医療能力と作戦計画に関する教育訓練を行う二国間の医療イベントを企画するとともに、訓練での意見交換を通じて今後の実効性ある訓練の基礎を確立する等、航空自衛隊と米空軍の友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力するなどの功績が高く評価されての表彰となった。なお、米側被表彰者のガルシア 1 等軍曹は米国出張のために欠席されたため、代理として、同群運用中隊のジョアンナ・ホー少佐 (Maj Joana Ho) が参加された。また、第 18 航空団司令官 エヴァンス准将も所用により出席がかなわなかったが、第 18 医療群司令官 ジョン・P・マクファーレン大佐が参加された。

表彰式は、南西航空音楽隊による日米国歌の演奏から始まり、丸茂会長から冒頭の挨拶に続いて日米の被表彰者に表彰状と記念楯が授与され、被表彰者の功績が讃えられた。来賓祝辞において、鈴木基地司令及び米空軍を代表してマクファーレン医療群司令官からご祝辞をいただいた。お二方ともに、日米両国の協調が日本、そしてインド太平洋地域の安定と繁栄に大きく寄与しており、礎となっていること、加えて、その協調は部隊レベルまで至っており、今回の受賞者の活動は正にそれを具現化したものであり、今後もこの良好な環境を継続するために尽力する旨のお話をされ、受賞者に賛辞と敬意のお言葉を述べられた。表彰式後の祝賀会は、日本側のみでの実施となったが、丸野支部長

(p 12へ)

受賞者及び功績の概要		JAAGA AWARD 2023 Recipients and their Achievements	
部隊	受賞者	功績の概要	
航空自衛隊	偵察航空隊 (三沢) Misawa		米空軍と航空自衛隊三沢基地共同での児童養護施設への物品寄付活動に尽力するとともに スペシャルオリンピックにおける航空自衛隊和太鼓チームの参加を仲介する等 航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He coordinated with United States Air Force on a bilateral donation drive to an orphanage. In addition, he put a lot of effort into making the cameo performance of the Taiko Drum Team of Koku-Jieitai Misawa Air Base at the 35th annual Special Olympics 2023.
		TSgt SAKAMOTO Takashi 2等空曹 坂本 崇	
	横田気象隊 (横田) Yokota		基地准曹会長としてスペシャルオリンピックなどに参加するほか、気象隊准曹士先任として米空軍のカウンターパートとイベントを通じた交流を図るなど、日米交流の促進に寄与 He participated as the Chief Warrant Officer at Yokota Air Base, in managing of various joint U.S.-Japan competitions and events, including the Kanto Special Olympics. Furthermore, he has deepened and bolstered the relationship between Japanese and U.S. noncommissioned officers, as the Chief Warrant Officer in the Weather Squadron, through work and events.
		Warrant Officer YAMASHITA Yuichiro 准空尉 山下雄一郎	
	宇宙作戦群 (府中) Fuchu		日米最先任等会同や米宇宙軍コマンドーの来訪時などに日米交流の深化に寄与するとともに、日米友好祭において有効な広報活動を行う等、日米の相互理解の促進に貢献 He organized an overview of the Space Operations Group at the Japan-U.S. Senior Executive Meeting, contributing to deepening mutual understanding between Japan and the United States. In addition to making various arrangements and successfully accepting visits to space operations groups such as the U.S. Space Force Delta 2 Commander, he also opened a public relations booth in cooperation with the 5th Air Force at the Japan-U.S. Friendship Festival held at Yokota Air Base.
	MSgt SATO Shotaro 1等空曹 佐藤 章太郎		
Koku-Jieitai	第2輸送航空隊 (入間) Iruma		フロストバイトレースや関東スペシャルオリンピクスなどへの参加を通じて日米下士官相互の協力関係醸成に寄与 He has deepened and bolstered the relationship between Japanese and U.S. noncommissioned officers by participating in the Frostbite Road Race and the Kanto Special Olympics, and supporting event management.
		TSgt TERASHIMA Yukio 2等空曹 寺島 幸男	
	第9航空団 基地業務群 (那覇) Naha		米空軍第733航空機動中隊との交流を進化させるとともに、特にレゾリューション・ドラゴンにおいて関係部隊との物資輸送支援の調整を図り、米軍部隊との信頼関係の構築に尽力 He has deepened and bolstered the relationship between 733rd Air Mobility Squadron and 9th Air Wing Transportation Squadron. Furthermore, during Resolute Dragon 2023, he coordinated transportation support between the U.S. and Japanese units that participated in this exercise and promoted an excellent relationship of trust.
	MSgt KAWANO Satoshi 1等空曹 河野 聡		
米空軍	35th Fighter Wing (三沢) Misawa		日米共同統合演習「キーンソード」の第35戦闘航空団全体会議の統合要員を受け入れての準備に尽力するとともに日米の合同チームを率いて三沢基地航空祭を運営する等 航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進に献身的に尽力 He organized the 35th Fighter Wing's planning conference for Exercise Keen Sword, hosting joint personnel and led a team of planners as well as volunteers from both U.S. Air Force and Koku-Jieitai for Misawa Air Base Air Fest 2023.
		Capt Samuel G. Taylor 大尉 サミュエル G テイラー	
	374th Airlift Wing (横田) Yokota		横田基地 CGOC : Company Grade Officers' Council 企画委員会の連絡幹部として空自幹部や事務官を招聘した意見交換の場を恒常化させるなど、日米交流の促進に寄与 He has regularly invited Koku-Jieitai executives and administrative officers to exchange opinions. Furthermore, he has deepened and bolstered the relationship inside and outside the base through the planning and management of various events.
	Capt Nathaniel W. Freeman 大尉 ナサニエル W フリーマン		
	18th Medical Group, 18th Wing (嘉手納) Kadena		緊急事態において重要となる医療能力と作戦計画に関する教育訓練を行う二国間の医療イベントを企画するとともに、訓練での意見交換を通じて、今後の実効性ある訓練の基礎を確立する等、航空自衛隊と米空軍との友好親善及び相互理解の増進を献身的に尽力 He organized two bilateral medical events to educate and train U.S. and Japanese members on key medical capabilities and planning for contingency operations. Furthermore, he has built up the foundations of a training platform for any future engagements through the discussions during the events
	MSgt David J. Garcia 1等軍曹 デイヴィッド J ガルシア		

のご挨拶に始まり、那覇基地給養班が丹精込めて調理された「タコ空上げ」に舌鼓を打ちつつ終始和気あいあいと受賞者を称える、温かな雰囲気にもまれた会となった。最後に、第9航空団基地業務群司令 山口1佐から締めのお言葉をいただき、すべての行事が盛会のうちに終了した。
(荒木(哲) 理事記)

お花見会
作：宇山 OB



コープ・ノース 24 参加隊員を激励 JAAGA cheers Koku-Jieitai Participants in Cope North 24

航空自衛隊は、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けて連携を強化すべく、海上自衛隊とともに日米豪共同訓練コープ・ノース 24 (以下「CN24」という。)を実施した。JAAGA は、前原理事長 (山田理事、太田理事同行) が1月22日(月)、府中基地に航空支援集団司令官森田雄博空将 (防衛部長内山均1等空佐同席)、横田基地に航空総隊司令官鈴木康彦空将 (副司令官影浦誠樹空将、幕僚長佐川詳二空将補同席)を訪ね、CN24への航空総隊及び航空支援集団の参加部隊を激励し、訓練の成功を祈念した。

懇談において、前原理事長から年初に発生した能登半島地震への対応を労うとともに、CN24での大きな成果を期待するとの話があり、両司令官からは日頃のJAAGAの支援に対する謝意が述べられるとともに、特に鈴木航空総隊司令官からは、能登半島地震において輪島分屯基地自体も大きな被害を出しつつも初動からしっかりと対応しており、航空総隊としても小松基地を活用して万全の対応に努めているとの話があった。またその様な状況下ではあるが、CN24にも計画通り参加し、これまで培ってきた共同対処能力及び相互運用性を更に向上すべく、新たなチャレンジを進めていくと述べられた。森田航空支援集団司令官からも能登半島地震への対応を万全にしつつ、CN24にもしっかりとコミットし、更なる能力向上を実現するとの力強い言葉が述べられた。CN24は、2月5日(月)～2月23日(金)の間、アメリカ合衆国グアム島及び北マリアナ諸島並びに同周辺空域において、日本、アメリカ合衆国及びオーストラリア連邦の3か国による各種戦術訓練を実施し、日米共同対処能力及び3か国の相互運用性の向上を図るとともに、人道支援・災害救援活動に係る共同訓練を実施し、部隊の能力及び参加国間の連携要領の向上を図ることを目的として実施された。主要参加部隊は、第8航空団(築城)、第9航空団



(那覇)、航空戦術教導団(百里等)、航空救難団(入間等)、警戒航空団(浜松)、第1輸送航空隊(小牧)、航空保安管制群(府中)、航空気象群(府中)、航空機動衛生隊(小牧)、自衛隊入間病院(入間)及び補給本部(十条)であり、F-15J/DJ × 6機、F-2A × 6機、U-125A × 1機、UH-60J × 1機、E-767 × 1機及びC-130H × 1機が参加し、人員は約500名が参加した。(太田理事記)



訓練参加所感

CN24 訓練実施部隊指揮官 第8航空団飛行群司令(当時)
1等空佐 三宅 英明(現北部航空方面隊司令部防衛部長)



Hafa Adai! JAAGA会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。CN24における航空自衛隊訓練実施部隊指揮官を拝命した第8航空団飛行群司令三宅1佐です。

はじめに皆様から頂戴したご厚志に対し訓練実施部隊を代表し衷心より御礼申し上げます。ありがとうございました。さて、CN24は部隊の戦術技量の向上、共同対処能力及び相互運用性の向上等を目的として令和6年1月19日から3月6日までの間実施しました。参加国は日米豪加仏韓であり、日本からは空自隊員約500名と航空機約20機

並びに海自US-2部隊が参加しました。コープ・ノースは日米豪三か国が共同開催する演習であり、近年は特にACE(機動分散運用と捉えていただければと思います。)に力を入れており、今回もアンダーセン、サイパン、テナアン、グアム国際空港及びNorth West Field(アンダーセン基地の北西にある着陸帯。以下「NFW」と言います。)に航空機を展開させ運用しました。空自の戦闘機はNFWに展開(米軍以外の戦闘機がNFWに着陸したのは今回が初めてとのことでした。)し、各種戦術訓練を実施しました。ま

た、今回からは Multi National Task Force (以下「MNTF」といいます。)を編組し、MNTF 司令部で一元的に指揮を執るとい訓練体制で実施しました。私もコープ・ノースには度々関わる機会があり、訓練実施部隊指揮官も2度経験しましたが、訓練内容は年々進化しており、特に、今回は大きな転換点であったように感じました。次年度も新たなチャレンジが検討されており、まだまだコー

プ・ノースは進化していくと思います。加えて、グアム日本人会主催による日米合同慰霊祭にも参加することができ、非常に有意義な訓練となりました。引き続き、皆様のご指導、ご鞭撻及びご支援をお願いしますとともに、末筆ではございますが、JAAGA 会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



Participating Joint Memorial Service held by Japan Club of Guam for the first time

は大きな転換点であったように感じました。次年度も新たなチャレンジが検討されており、まだまだコー



F-2 first operation at NFL



“Elephant Walk”

訓練参加所感

航空支援集団司令部 2等空佐 蛭原 覚



JAAGA 会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のことと存じます。日米豪共同訓練 (CN24) への参加にあたり皆様から頂いた温かい激励に深く感謝申し上げます。お陰様を持ちまして所要の訓練を終了し、所望の成果を上げ無事に帰国したことを報告致します。本年度も前年度と同様に、全ての参加部隊は航空総隊司令官の指揮の下、一つの訓練実施部隊として参加し、航空支援集団は主として訓練実施部隊本部班、輸送機訓練隊 (C-130H)、即応機動訓練隊及び医療訓練隊等に所要の人員及び装備品を差出し、航空総隊司令官の指揮を受けました。また、例年同様、訓練部隊の展開、撤収における人員及び装備品等の輸送を行うとともに、空自戦闘機に対し展開及び撤収時に、そして訓練空域において空中給油を実施しました。輸送機訓練隊 (C-130H) は、日米豪共同による指揮所活動の演練へも参加し、その演練の一環として、日米豪の輸送関係幕僚により初めて設置された空輸統制所 (AMPC: Air Mission Processing/Planning Cell) での活動を実施しました。AMPC では、策定された輸送計画に柔軟に対応し、米空軍が提唱する、ACE (Agile Combat Employment: 柔軟な機動運用) に係る航空輸送を米豪軍輸送機とともに整齐と実施しました。また、輸送機に搭載する貨物の容積を統一することにより日米豪等の機種に左右されず貨物の搭載を可能にする等、共同対処能力及び相互運用性を向上させるとともに、本邦内での訓練が困難な不整地着陸を実施

し、当該能力を向上させました。即応機動訓練隊は、空自戦闘機が展開した NWF (North West Field) において、飛行場機能が不足した場所を作戦基盤化するため米加軍 CR (Contingency Response) 部隊とともに LZ (Landing Zone) を運用しました。その際、空自航空機のみならず、他国軍航空機に対しても気象情報をはじめとする LZ における安全な離着陸に資する各種情報を提供しました。また、米空軍のみならず、米海兵隊による FARP (Forward Arming and Refueling Point) 訓練を研修することにより、展開先の作戦基盤造成及び運用について実地に確認し、空自の機動展開に係る各種教訓を得ました。医療訓練隊は、空自として初めて日米豪 AE (Aeromedical Evacuation) チームによる航空医療搬送訓練を実施するとともに、地上における航空後送前患者前進待機所を米軍が設置した救護所及び豪軍が設置した病理検査所と統合させ、機能を相互に補完しながら3か国共同で運営することにより、共同対処能力を高めることができました。各訓練参加者は、本訓練で得た成果、教訓を活かし、それぞれの部隊において、日々の任務、練成に臨み、部隊の精強化に励む所存であります。末筆ではございますが、JAAGA 会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、お礼の挨拶とさせていただきます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお祈り申し上げます。



Take off from “Baker LZ”



The First Trilateral AE Operation



Group Photo of Combined Exercise Control Group

JAAGA 会長、PACAF 司令官交代式参加

JAAGA President attends PACAF Change of Command ceremony

○はじめに

去る 2024 年 2 月 9 日（金）に太平洋空軍（PACAF: Pacific Air Force）の司令官が、ウイルスバック大将（Gen Kenneth S. Wilsbach）からシュナイダー大将（Gen Kevin B. Schuneider）に交代した。第 37 代 PACAF 司令官の誕生である。太平洋空軍と航空自衛隊は非常に緊密な関係を構築してきたが、令和 4 年 12 月に策定された戦略 3 文書に基づき「防衛力の抜本的強化」に向けて両空軍間の連携は更に重要となると考えられる。これを支援する役割を担う JAAGA から丸茂会長夫妻（元航空幕僚長）、井筒顧問夫妻（前航空幕僚長）、及び山田理事夫妻（元支援集団司令官）の 6 名がパールハーバー・ヒッカム統合基地で行われた PACAF の指揮官交代式に参列した。

新司令官のシュナイダー大将は 36 年間の米空軍のキャリアの内、3 分の 1 をインド太平洋地域で勤務し、中でも 2019 年 2 月～2021 年 8 月まで約 2 年半にわたって在日米軍司令官、兼ねて第 5 空軍司令官を務め、我が国との同盟関係を支えてきた人物であり、今後更なる日米関係の発展と、同地域の平和と安定への貢献が期待される。

また、太平洋空軍司令官を離任したウイルスバック大将は、航空戦闘軍司令官（ACC: Air Combat Command）に異動された。新旧の両司令官はともに JAAGA の役割にご理解をいただき、現役ながら名誉会員として JAAGA の様々な活動にご協力をいただいている。

○司令官交代式

司令官交代式はオールビン空軍参謀長（Gen David W. Allvin）が主催し、アクイリーノ米インド太平洋軍司令官（Admiral John C. Aquilino）、及び多くのゲストの参列の下で厳粛に執行された。

オールビン参謀長は式典のスピーチにおいて、米空軍はインド太平洋地域において平和と安定の維持に寄与しているが、その努力が常に脅威を受けているとの問題認識を示し、これに万全の対応をするため、同地域に深い見識を有するシュナイダー司令官が PACAF チームをけん引していくことに大きな期待を示した。また空軍は組織を上げた再最適化を断行しているが、その最前線である PACAF に

おけるシュナイダー司令官のリーダーシップの発揮は、米空軍のみならず同盟国及びパートナー国に利益をもたらすことを確信していると述べた。

PACAF は、世界の国内総生産のほぼ 60%、世界の経済成長の 3 分の 2、世界の核保有国の内 5 ケ国、軍事大国 10 ケ国の内 7 ヶ国が存在する、安全保障上の重要なインド太平洋地域を担任している。シュナイダー司令官はこの地域の情勢について、「1990 年に初めてこの地域に勤務して以来、インド太平洋地域の不安定な安全保障環境を継続的に見てきたが、国際関係は相互関係が深まり、より挑戦的であり、そしてより深刻になってきた。今日、米国とこの地域の同盟国とパートナー国は、ルールに基づいた国際秩序を破壊しようとする者たちによる挑戦に直面している。」とし、中国の南シナ海における軍事力を背景にした領域の拡大行為を示唆した上で懸念を示した。

また、過去 3 回の PACAF での勤務経験があるシュナイダー司令官は、「家に帰ったようだ。」との親近感を示したうえで、隷下となる 9 個の主要空軍基地及び 3 つのナンバード空軍の 46,000 人の空軍人に対し、「この地域の平和と安定の創出及び我々への挑戦を抑止する道は遠く長いが、決して米軍だけでは無く、実力のある同盟国及びパートナー国と協力して達成していくものである。」として引き続き同盟国及びパートナー国との共同を進めることを要望した。

加えて、PACAF の戦略 2030 に示されている事項のうち、「空軍兵士の育成」、「即応体制の構築」、及び「近代化の推進」を優先事項として明示した。

アクイリーノ米太平洋軍司令官は、共に勤務したウイル



Gen Kevin B. Schuneider, PACAF new commander



Change of command ceremony



Admiral John C. Aquilino

スバック大将の司令官としての献身的な統率と過去3年間にわたる卓越したリーダーシップにより PACAF の航空作戦能力が強化されてきたことにあらためて敬意を表した。特に、



Gen Kenneth S. Wilsbach
(center)

過去最大の太平洋空軍参謀長シンポジウムを主催し、多くの国々と深い友好関係を築くとともに、PACAF 戦略 2030 の策定や ACE (Agile



Admiral John C. Aquilino

Gen David W. Allvin



Gen Kenneth S. Wilsbach

Gen Kevin B. Schuneider
(center)

Combat Capability) コンセプトを開発し実行に移した功績を称賛した。

ウィルスバック大将は、20 年以上にわたってインド太平洋地域で勤務し、PACAF 司令官として勤務できたことを誇りに思うとともに、この責任を引き継ぐシュナイダー司令官が引き続き統合・共同作戦能力を強化してくれることを確信していると述べた。

○ JAAGA 名誉会員等との交流

司令官交代式及びそれに続くレセプションにおいては、アクイリーノ太平洋軍司令官及びオールビン空軍参謀長との懇談機会を得ることができた。これにより米軍トップリーダーに対して、日米空軍種間の強固な繋がりと JAAGA の活動をアピールすることができた。

また、JAAGA 会長以下のメンバーは、シュナイダー司令官の招待で司令官宅における祝賀夕食会に参加した。夕食会は司令官のご意向でご家族や由縁のある、比較的少人数の参加者で、和やかな雰囲気で開催された。ドローン元在日米軍司令官、兼ねて第 5 空軍司令官等の米空軍のメンバーが招待されたが、同盟国等で招待されたの

は日本だけであり、かつ夫妻での参加ということもあり、日米同盟関係の絆の強さを改めて実感した。

夕食会では、4 スターへの昇任と共に PACAF 司令官への着任をあらためてお祝いし、丸茂会長より JAAGA からのごギフトを贈呈した。

○ 連絡官によるサポート

太平洋空軍司令部と航空自衛隊の協力関係は近年非常に緊密になっている。作戦運用にあたっては同盟調整メカニズム (ACM: Allied Coordination Mechanism) に基づき PACAF 司令部と航空総隊司令部は航空作戦センター (AOC: Air Operation Center) を通じて日々の連携をしているが、このように地理的に離れた連携を支えるために、現在五代 1 佐他 4



Dinner at the commander Schuneider's house

名の連絡官が PACAF 司令部で勤務している。少し詳しく説明すると、航空自衛隊からは PACAF 司令部へ 4 名 (情報、運用、国際関係及び通信・サイバー担当部署)、94th AAMDC (Amy Air and Missile Defense Command: 米陸軍防空ミサイル防衛司令部) へ 1 名が派遣されている。

今回の指揮官交代式は、米国会での人事承認の遅れが原因で昨年の夏以来、実施時期が決まらず、JAAGA 会長以下のハワイ訪問がなかなか決められない状況であった。

最終的には時期が決まったものの直前の決定であり、JAAGA 会長以下の交代式への参加は、連絡官の支援なくして実施することができなかった。連絡官の心のこもった協力・支援、そして素晴らしい活躍に、この場を借りて心からの感謝を申し上げたい。
(武藤当時副理事長記)



花見
作：宇山 OB

日米相互特技訓練を激励支援

JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

4月3日(水)、日米相互特技訓練激励のため、前原理事長(山田理事、太田理事同行)が、横田基地に第5空軍(以下「5空軍」という。)司令部参謀長



Talking about further Bilateral NCO Exchange Program

ロッシュ大佐(Col Dan Roesch, 5AF Chief of Staff)を訪問した。ロッシュ参謀長との懇談には、5空軍司令部情報部リード中佐(Lt Col Kevin Reed, Deputy Director, A2)、5空軍最先任上級曹長アイエロ最上級曹長(CMSgt Shawn Aiello, Command Chief Master Sergeant, 5AF)、5空軍司令部第4部所属日米交流担当管理担当のラーソン1等軍曹(MSgt Thomas Larson, Superintendent, Bilateral Engagement, A4)、5空軍の軍人相互・支援組織“Fighting Fifth Booster Club”代表のレイサン氏(Mr. Cameron Lathan, President, the Fighting Fifth Booster Club)が同席された。まず、ロッシュ参謀長

から日頃のJAAGAからの支援に謝意が述べられるとともに、アイエロ最上級曹長及びラーソン1等軍曹から直近半年で行われた日米共同訓練



With Mr. Lathan, President of the “Fighting Fifth Booster Club”

についての説明があった。これまで行われてきた「日米

相互に受入れ基地を決め、相互に隊員を差出し・受入れする形での訓練」ではなく、三沢基地での共同訓練やコープ・ノース演習の中で、実戦的なシナリオ下、「Multi Capable Airmen」として共に活動し、能力を向上するという形で訓練が行われたとのことであった。今後も日米相互運用性をより強化できる実戦的な形の訓練が進められていくものと思われ、空自としても本訓練の枠組みなどを検討していくものと思われる。



また、前原理事長から、航空自衛隊のF-35配備に伴い、英語のみによる端末情報の確認や操作などが標準となってきたが、隊員の英語能力の向上が喫緊の課題となってきたとの現状が話されると、米側からは「FMS (Foreign Military Sales: 米国政府が装備品等を有償で提供する対外有償軍事援助)」のため5空軍としてできることに制約はあるが、例えば、これまででも部隊毎に行ってきた英語学習の機会を拡大し、特に整備に関わる隊員の英語能力向上を支援する機会を増やすなどの施策を考えているとの話があった。前原理事長は、ありがたい施策であり、JAAGAとしてもしっかりと支援していきたいと述べた。また広報に関して、5空軍としても積極的な情報発信に努めているが、JAAGAだよりも適時に情報を提供したいとの申し出も頂いた。(太田理事記)

令和5年度MCA(Multi Capable Airmen)訓練について

○ 嘉手納基地 MCA 訓練【18th Wing Operations & Logistics Kadena AB】

【参加者】14名(うち航空自衛隊から4名参加)

【訓練概要】①米軍の軍事コンセプトの一つであるACE(Agile Combat Employment)の必要性和ACEを実施する上でのMCAの重要性についての講義を受講した。②通信、基地警備、衛生(TCCC:Tactical Combat Casualty Care)、テント設営、滑走路補修基礎訓練を受け、最終日に総合訓練を実施した。



○三沢基地 MCA 訓練 【35FW ACE Misawa AB】

【参加者】 18 名（うち航空自衛隊から 13 名参加）

【訓練概要】 不発弾処理概要、フォークリフト操縦訓練、カモフラージュ設営、滑走路上のファイバーグラス設置等訓練を実施し、最終日に総合訓練を実施した。



令和 5 年度 JAAGA 嘉手納基地等研修

JAAGA members' Visit to Kadena AB on February 28 and 29, 2024

【全般】 2月28日（水）から29日（木）の2日間、航空自衛隊那覇基地及び米空軍嘉手納基地の研修を実施した。研修団には、団長として松田幹生正会員、副団長として岩井克文個人賛助会員及び鈴木論団体賛助会員を迎え、研修員31名（正会員2名、個人賛助会員18名、法人賛助会員11名）と同行理事4名（引田、今瀬、朝倉及び太田）の総勢38名が参加した。また JAAGA 主催夕食懇親会には、沖縄支部から丸野礼治支部長以下4名が加わった。

日米の関係部隊の周到な準備ときめ細やかな対応、指揮官自らの概況説明や丁寧な質疑応答などを通じ、南西域の特性及び日米安全保障体制の重要性を再認識し、近年の情勢推移と緊迫度の増す現状を実感するとともに、各級指揮官等との懇親の場も含め現場部隊における緊密な日米連携の状況についても確認することができた。 （太田理事記）

研修第 1 日目

【入間基地集合・結団式】 研修参加者は、入間基地稲荷山門に集合し、受付の後、入間基地のバスに乗車して空輸ターミナルまで移動した。中部航空方面隊（以下「中空」という。）副司令官増田友晴空将補、中部航空警戒管制団（以下「中警団」という。）司令佐藤網夫空将補及び第2輸送航空隊（以下「2輸空隊」という。）司令太田将史1等空佐の出迎えを受け、団長及び副団長との懇談の場が持たれた。松田団長から、日頃の厳格な任務遂行と研修支援に対する謝意が述べられると、



A lot of JAAGA members are gathered on the Study Tour

増田中空副司令官からは、JAAGAの日頃からの支援に対する謝意が述べられるとともに、年明けに発災した能登半島地震への中空の対応状況についての説明があり、佐藤中警団司令からは、自らが被災しつつも任務に当



Tour Leader Matsuda talks about current defense issues with Maj Gen Masuda and Maj Gen Satoh

たる輪島分屯基地の奮闘状況についての説明が加えられた。懇談後、結団式を行い、団長及び副団長から研修にあたっての抱負、要望等を含めた挨拶を頂き、同行理事も含めた参加者全員の紹介が行われた。また、全般の注意事項として「許可を得た写真撮影の実施」が伝えられた。

【C-2 型輸送機での那覇基地への移動】 心配された天候も杞憂に終わり、晴れ間の広がる中、増田中空副司令官、佐藤中警団司令及び太田2輸空隊司令の見送りを受け、JAAGA 米軍等研修では初となるC-2に搭乗し那覇基地へ向かった。研修者はその大きな貨物空間に驚くとともに、快適な座席や騒音が軽減された明るい室内環境にも驚いていた。飛行間、所々で雲に入り、軽い気流の乱れがあったためシートベルトの開放はされなかったが、機長の好意によりコックピット見学が実施さ



Fly into NAHA by C-2 for the first time on JAAGA tour

れ、希望者は最新の操縦席の器材や表示、操縦状況などを確認することができた。

【那覇基地における昼食】幹部食堂で準備していただき、隊員と同様、各自がお盆を持ち、ご飯、主菜等を受け取り、席に着くというスタイルの昼食を体験した。ボリュームもあり、たいへん美味しかったとのコメントが多く寄せられた。

【嘉手納基地への移動】昼食後、那覇基地のバスに乗り込み、高速道路を使用して1時間ほどで嘉手納基地に到着した。その後米空軍バスに乗り換え、説明会場となる「ROCKERS」下士官クラブに移動した。研修団到着時には、第18航空団（以下「18FW」という。）司令官ニコラス・B・エバンス准将



Brig Gen Evans makes Command Briefing with smile

(Brig Gen Nicholas B. Evans, Commander of 18th Wing) と 18FW 副司令官ジョシュア・D・ランデビー大佐 (Col Joshua D. Lundebey, Deputy Commander of 18th Wing) に笑顔で出迎えていただいた。

【嘉手納基地及び18FW概況説明】エバンス司令官から、研修団歓迎の挨拶に続いて、嘉手納基地及び18FWについての概況説明をしていただいた。北朝鮮や中国などに対応する上で、嘉手納基地は地理的に非常に重要な位置にあること、同盟国・パートナー国と連携を取るうえでも「KEY STONE OF THE PACIFIC（太平洋の要石）」であり、南・東シナ海や台湾などへの重要な支援拠点であること、また嘉手納基地には約18,000人の米軍人・軍属と約3,000人の日本人従業員等が「チーム・カデナ」として勤務しており、日本からの多大な支援に感謝していることなどの説明があった。また最近のトピックについても話され、一つ目は、無人機MQ-9「リーパー」についてであった。日本初の配備ということで注目を集めたが、地元首長等を招いて安全性等について説明する機会を設けたとのことであった。二つ目は、中国の第5世代戦闘機J-20などへの対応にあたり、これまで配備してきたF-15は最適解ではなく、嘉手納基地に配備する戦闘機の最適化検討を進めているとのことであった。三つめは、メディアでよく取り上げられ

る嘉手納基地でのパラシュート降下訓練についてであった。特殊部隊にとってこの降下訓練は不可欠なものであり、主として伊江島で行っているが、天候不良等により実施できない場合は「日米合意に基づき代替場所の嘉手納基地で実施」しているとのことであった。またコロナ禍が収束してきたことから、4年ぶりに各種のイベントを復活させ、地元との交流を深めているとのことであった。

Q&Aセッションでは、参加者からの活発な質疑に対し、部隊の現状や地域との関わりについての司令官の考え方などを丁寧に回答していただき、嘉手納基地の状況について更に理解を深めることができた。

【嘉手納基地施設及び主要装備品の見学】概況説明の後、「飛行場ツアー」として大型バスに乗車して広大な敷地を巡った。広報担当将校から、各種整備施設、駐機エリア毎の特徴、駐機されている機体の概要などについて説明を受けつつ、空中給油機や電子作戦機等の大型機、特殊作戦機、無人機、救難機、F-35を含む戦闘機などを見学した。残念ながら、機体を前にした細部説明などは無かったが、嘉手納基地の概要、ローテーション配備も含めた所在航空機の概要を理解し、最前線基地の張りつめた緊張感を感じることができた。

【JAAGA主催夕食懇親会】宿泊場所である那覇市内のホテル内会場で、嘉手納基地主要幹部等米軍関係者12名、航空自衛隊那覇基地主要幹部等7名を招待し、JAAGA主催夕食懇親会が開催された。

カクテルタイムでのリラックス後、朝倉理事と18FW広報局ロートン2等軍曹（TSgt Benjamin Raughton, 18th Wing Public Affairs）との息の合った日米両司会により会は円滑に進行された。

はじめに、松田団長から挨拶があり、自身の空自での戦闘機操縦者としての勤務経験、特に搭乗機F-86D、F-104Jでの米空軍パイロットとの親密な関わりや海上自衛隊自衛艦隊司令



Leader Matsuda makes opening remarks including episodes in his KOKU-JIEITAI service



部に航空総隊連絡幹部として勤務された際の「航空総隊と第7艦隊間の協定」調印に関わるエピソードなどが披露され、国際情勢が緊迫、複雑化し、日米両国の協力が日ごとに重要性を増しているこの時期にアメリカ空軍の精鋭「チーム嘉手納」を研修できたことは非常に有意義であると述べられた。続いて、ランデビー副司令官から挨拶があり、夕食会招待への謝意と28年間にわたり日米空軍種の絆を強化することに尽力してきた



Col Lundeby makes opening remarks as well

JAAGA に対する謝意が述べられた。また、周辺国の自由で開かれたインド・太平洋に対する挑戦は憂慮することであるが、



Tour members enjoy dinner and talk

コープ・ノース演習等で日米共同作戦能力の向上が図られており、「太平洋の要石」として、嘉手納基地は重要な役割を果たし、日米の信頼と連携の下、地域の脅威を抑止すると力強く述べられた。

加えて今後とも JAAGA の活動に期待すると述べられた。

その後、ランデビー副司令官はじめ嘉手納基地からの招待者8名と南西航空方面隊（以下「南西空」という。）司令官谷嶋空将はじめ那覇基地からの招待者7名と JAAGA 沖縄支部の丸野支部長、相原事務局長及び大宜見会員夫妻が紹介された。

谷嶋南西空司令官からの「南西エリアでのゆるぎない日米連携を更に強化していく」との力強い乾杯の発声により宴は開始された。7つのテーブルに着いた参加者は、前菜からデザートに至るまでの華やかな料



“EISA” club from NAHA AB shows excellent performance

理に舌鼓を打ち、お好みの飲み物で喉を潤しながら、和やかに、また賑やかに会話を弾ませた。お腹も会話も一息ついた頃、スペシャルゲストとして那覇基地エイサー部が登場し、その素晴らしい演技に場が大いに盛り上がった。楽しい時間は瞬く間に過ぎ、名残惜しい状況であったがお開きの時間となり、岩井副団長から「日米現役隊員の皆様と垣根なく話すことができ、貴重でとても有意義な機会でした」との言葉を頂き、締め乾杯となった。



Closing remarks by Deputy Leader Iida

研修第2日目

【那覇基地主要幹部との懇談】 宿泊場所から那覇基地大型バスにより基地合同庁舎まで移動した。庁舎前には、谷嶋司令官はじめ、南西空副司令官中島隆幸空将補、第9航空団司令兼那覇基地司令鈴木繁直空将補が出迎えられ、応接室にて団長及び副団長との懇談が持たれた。松田団長からは沖縄本土復帰後間もない時期に勤務した際の苦労話などが話され、谷嶋司令官からは現状について、また鈴木基地司令からは基地の地道な努力を通じた変化の状況などについて話された。

【南西空司令官講話】 基地講堂に移動し、たいへん印象的な司令官講話を頂いた。よく整理されスライドが用意され、司令官のユーモア溢れる分かり易い説明に加え、ところどころクイズ形式で研修者に問いかける場面もあり、近年の南西方面の急速な情勢緊迫と厳しい現状への対応状況についてよく理解でき、その緊迫感を実感できた。また、研修員からの質問に対しても丁寧に回答していただき、更に理解が深まった。

【那覇基地司令講話】 鈴木那覇基地司令から、基地の沿革、海上保安庁、警察機関と隣接し、陸上・海上・航空自衛隊の部隊が所在するといった那覇基地の特性、我が国防衛の要となる南西方面での陸海空3自衛隊の日頃の連携のみならず、米陸海空軍及び海兵隊4軍との緊密な連携や訓練実施状況などが説明された。

【第9航空団 F-15J 見学】 研修の締めくくりとして、第9航空団の F-15J を見学した。同団飛行群司令高倉征宏1等空佐から F-15J の機体に関する全般説明、パイロットの装備である HMD (Helmet Mounted Display)、耐 G スーツ、救命装具の説明があり、その後は3つのグループに分かれ、見学用ラダーが設置された3機の機体でコックピット見学が行われた。研修者は、一人ずつ交代でコックピットに乗り込み、座席に座って、現役パイロットの説明を受けた。コックピットに収まった研修者は一様に、計器やスイッチ類を目の当たりにして目を輝かせ、パイロットの説明を食い入るように聴いていた。概要説明等に加え、実際に第一線で働く隊員と装備に触れ、現場の緊張感を肌で感じる事ができたとのコメントが聴かれた。

【那覇基地主要幹部との昼食会】 部食堂において、谷嶋司令官、鈴木基地司令はじめ那覇基地主要幹部等との昼食会が催された。研修員は参加隊員との会話を楽しみながら、基地特製の「空上げ」と沖縄色溢れる食事に舌鼓を打った。

【解団式】 すべての研修を終え、往路と同じく C-2 に搭乗して入間基地に戻り解団式を行った。岩井副団長、鈴木副団長からは「米空軍、那覇基地の現場を垣間見ることができとても勉強になりました」との所見が述べられた。松田団長からは「皆健康で帰れたことに感謝」とともに、「研修の準備から実行にあたり多大なる支援を頂いた日米受け入れ部隊及び支援部隊関係者、参加者の力添えと協力に感謝」との謝辞が述べ

られ研修団は解組となった。

参加者の多くから、「南西域の緊迫した状況、空自と米軍そして地域が一体となって我が国やインド太平洋地域の平和と安定に取り組んでいる現状、その絆の強さを実感できた有意義な研修でした」との声が寄せられた。（太田理事記）



Tour members receive an overview of F-15



Maj Gen Suzuki give an overview of NAHA AB



Group Photo with Lt Gen Yajima, Commander of Southwestern Air Defense Force, Maj Gen Nakajima, Vice Commander and Maj Gen Suzuki, Naha AB Commander

研修所感 法人賛助会員 丸紅エアロスペース株式会社第一営業本部 航空機器ビジネスユニット主任 山本 晴可

今回初めて JAAGA 研修に参加させていただきました。日頃の業務にて航空自衛隊各補給処のご担当者を訪問する機会はありませんでしたが、基地にて勤務されている隊員の方々とお話しする機会は少なく、特に今回の研修先である那覇基地及び米軍嘉手納基地への訪問は初めての機会であり非常に貴重な経験をさせていただきました。

航空自衛隊入間基地から那覇基地へ向けての移動の際、C-2にて移動しました。自衛隊の機体搭乗は初めての経験でしたが、予想以上の広さに驚きました。また、移動中にコックピット周りの設備を説明いただき非常に勉強になりました。到着後、嘉手納基地にて第18戦闘航空団司令官ニコラス・B・エバンス空軍准将から中国・北朝鮮・ロシアからの侵略行動の抑止に向けての防衛任務についてご説明いただきました。中国の戦闘機の高機能・最新化に合わせた機体配備調整などをされており、米国として

も嘉手納基地での防衛任務を重視されていることを改めて感じました。

その後、南西航空方面隊司令官谷嶋空将より那覇基地及び南西航空方面隊について説明を受けました。

対領空侵犯措置任務や有事の際に陸上・海上自衛隊や米軍と連携して対応できるよう日頃から合同訓練を実施していることを学びました。また、夕食懇親会では米軍・空自主要幹部の方々とご一緒させていただき、皆様気さくにお声がけ下さりとても楽しい時間を過ごさせていただきました。今回の研修を通して日々の業務の先に今回お世話になった方々がいらっしゃることを改めて感じ、今後も引き締めて日々の業務に邁進する所存です。

この度はこのような貴重な機会をいただきありがとうございました。



研修所感 法人賛助会員 東京航空計器株式会社航空宇宙事業本部 航空企画部 営業課 横山 果那

今回、研修に参加させていただき、普段入ることができない場所、見ることができない物、聞くことができないお話などその他たくさんの貴重な経験をさせていただきました。また、今回の研修では航空自衛隊、米空軍の日々の取り組み及び日本の周りの国々の状況について学ぶことができました。

今回の研修に参加させていただき、個人的に印象に残っていることを3点紹介させていただきます。1点目はC-2に搭乗したことです。椅子の向き、内装、全てにおいて普段我々が利用する旅客機とは異なりました。シートベルト着用サインは旅客機同様設置していたので、そのような共通点もあるのだなと思いました。また、操縦中のコックピットに入らせていただき、パイロットと同じ視点を見ることができたことは今後二度とない経験だなと思いました。道が無く周りに雲しかないところを目的地に向け操縦しているパイロットの技術力を目の前で見るできました。

2点目は、自社製品が機体に搭載されているところを見ることができたことです。F-15を見る機会をいただき、普段単体で

しか見ることができない弊社製品が機体に搭載されているところを拝見できました。お客様にご使用いただいているところを生で拝見することはなかなかないので、印象に残っております。

3点目は、いろいろな方とお話できたことです。普段かわることがない方や、現役自衛官として日々業務に尽力されている方、引退された方など様々な方とお話できました。引退された方がキラキラ目を輝かせながら現役時代にどのような業務についていたか教えてくださったことにより、航空自衛隊で働くということは大変だけどそれほどやりがいがあるお仕事なのだなということがわかりました。

最後になりますが、今回の研修にご尽力された関係者皆様に感謝申し上げます。また、社会人経験が浅く戸惑っていたところ、航空自衛隊の関係者の所に連れて行ってくださったり、色々教えてくださいました理事の皆さまにも感謝申し上げます。



研修所感

法人賛助会員 ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド
日本ロッキード マーティン政策渉外部長 マシュー W. コルピッツ (Matthew W. Colpitts)

I had the opportunity to participate in the Japan America Air Force Goodwill Association(JAAGA) visit to United States Air Force Kadena Air Base and Japan Air Self-Defense Force (JASDF) Naha Air Base in late February. The background of participants was rich in diversity, ranging from restaurant owners to employees of defense companies like myself. JAAGA coordinated flights to and from Okinawa via a JASDF Kawasaki C-2 transport aircraft from JASDF Iruma Base near Tokyo.

During the event, speakers stressed the importance of maintaining robust people-to-people exchanges with local communities as these relationships are the true cornerstone of the U.S.-Japan Alliance. The spirit of the alliance is one enshrined in the principles of multi-generational friendship and mutual respect, and a significant counterpoint to politically expedient tie-ups observed elsewhere in the region and globally. The U.S.'s commitment to the alliance as an unwavering bipartisan priority was evident during the visit. At Lockheed Martin, this commitment is echoed in our determination to deepen our seven decades of partnership with Japanese industry by diversifying our relationships with small-to-medium enterprises and startups working on new, disruptive technologies.

The delegation then visited JASDF's Naha Air Base and received a brief on regional threats that Japan and the U.S. stave off through

collective deterrence. The most salient point of the brief was the number of ballistic missiles China maintains which are capable of striking any location within Japan. This Chinese missile ratio was broached during a discussion on the limitations of a purely defensive posture and how this drives the necessity for counterstrike capability acquisition. Later, participants went on a tour of a hangar where JASDF pilots discussed the current and future states of conflict such as human resource constraints and the teaming of manned and unmanned platforms.

Many of the topics of discussion were later featured within April's U.S.-Japan Joint Leaders' Statement. This year's tour of Okinawa was truly a remarkable experience made more poignant due to the

JAAGA organizers' incredible insights to the U.S.-Japan Alliance and their unparalleled network among the men and women in uniform within both the U.S. Air Force and the Japan Air SelfDefense Force. Thank you, JAAGA it was truly a pleasure to participate in this year's tour.

Kindly,
Matt Colpitts



日本刀「冬廣」 - キセキの物語の続き

Another miracle of Japanese sword "FUYUHIRO"

「冬廣」と呼ばれる一振りの日本刀が米国から日本に返還されたことを紹介した記事（JAAGA 便り第 63 号（16 December 2022））をご記憶であろうか。日本刀の返還に纏わる数奇な「軌跡」を JAAGA と AFA（米空軍・宇宙軍協会）の関係者の多大な熱意と努力によって起きた細やかな「奇跡」と捉えた記事である。執筆者の池田理事は、日本刀返還事業の重要な関係者の一人でもある。

その詳細は、当該記事をご覧くださいとして、概要は次の様なものであった。米空軍将校の奥様カーショウ夫人(写真①左)が、ご両親から譲り受けた一振りの日本刀をその故郷である日本に返すというご主人の遺志を叶えたいと願い、その糸口を探し続けてきたことに端を発する。長年の努力にもかかわらず叶わなかったその願いを AFA 会長であるライト氏（元在日米軍司令官、JAAGA 名誉顧問）に託し、それが JAAGA 関係者に伝えられたのであった。JAAGA の複数の理事がプロジェクトチームを組み、その方法を検討して、ようやく道筋が見えてきたのは 1 年後の事であった。しかし、コロナ禍によって、返還実現までに更に 2 年間待たなければならなかった。2022 年 JAAGA 訪米事業の際、訪米団団長の杉山 JAAGA 会長（当時）に託されて、日本刀はようやく日本に持ち込まれた。その後も、様々な手続きを経ながら、岡山県の備前長船刀剣博物館に寄贈されたというものである。

このキセキの物語には「続き」が存在した。今年 1 月に一つの節目を迎えた物語の「続き」を紹介させて頂きたい。併せて、僅かばかりではあるが関与させて頂いた者としての所感を述べたいと思う。昨年 9 月の JAAGA 訪米団との懇親会において、ライト氏から 12 月末に訪日し、ご家族と共に日本で年末年始を過ごす予定であることが告げられた。その際、かつて自分が日本で勤務した際、お世話になった自衛隊関係者にお会いしたいとの要望があり、訪米事業で調整窓口を務めていた筆者がそのお手伝いを引き受けることとなった。元統幕議長や統幕 3 室長、千歳・三沢基地司令、統幕長、空幕長等々の大先輩方の連絡先を確認するのに少々手間取ったが、都合のつく方は皆様喜んで参加を表明された。歴代の JAAGA 会長・関係者も招待されたが、代表して参加されることとなった現丸茂会長から、「冬廣」はその後どうなっているのかを確認するよう指示があった。池田理事を通じて寄贈先の備前長船刀剣博物館に確認したところ、思いがけないニュースが飛び込んできた。そもそも「冬廣」は 600 年以上前の室町時代の作であり、研ぎを含めて展示できる状態にするのに数年かかると言われていた。期間限

定ではあるものの、既に展示・公開されているという事実は驚きと同時に嬉しいニュースであった(写真②)。加えて、来日する観光客を含めて日本刀に興味を持つ外国人が増えていること、その様な外国人向けに英語で発信する市の職員、博物館員がいること等が、岡山県の NHK ニュースで取り上げられた。その中で日米の関係者の努力によって米国から持ち帰られた「冬廣」の物語について若干の紹介があったということであった。

(<https://www3.nhk.or.jp/news/okayama/20231128/4020018733.html> 参照)

この二つのニュースは、勿論、12 月末にニュー山王ホテルで開かれたライト氏主催のレセプションで紹介され、大いに話が盛り上がった。ライト氏を始め参加者一同が日米同盟の強い絆を象徴する良いエピソードであるとして大いに盛り上がり、会の中締め発声は「日米同盟万歳」であった。この会では、ライト氏の日米同盟強化に果たされた長年のご貢献並びに日本刀返還に対するご尽力に対する感謝の意を込めて、参加者一同で目録付きの居合刀をプレゼントさせて頂いた(写真③)。帰国されたライト氏からは、居合刀をご自宅の一番目立つ場所に飾っている写真が送られてきた(写真④)。この居合刀は今後も AFA と JAAGA の交流の中で長く語り継がれるものになると思われる。

このような状況を、そもそもの日本刀の所有者であったカーショウ夫人にもお知らせすべきと考え、筆者から「冬廣」が展示されている写真やライト氏とのレセプション時の写真などをメールとともに送らせて頂いた。ご婦人からのメールには丁寧なお礼の言葉と共に、生前、ご主人が日本刀のことを最初に相談し、親身にアドバイスしてくれた「Josyu Yamaguchi」氏にも返還が叶ったことを知らせたい、連絡先が分からないだろうかとお尋ねがあった。1990 年代のことであり、場所もベオグラードとのこと、更には「Josyu」という本名か、敬称かの区別もつかない名前であること等から、雲をつかむような話であった。しかし、カーショウ夫人とのやり取りを振り返っているうちに、ご主人が米空軍の駐在武官で



① Col Kershaw and his wife when working in Belgrade

あったことを思い出した（写真右）。ひょっとして「Josyu Yamaguchi」氏は、旧ユーゴスラビアに駐在武官として派遣されていた陸自の方ではないかと思いついた。勤務先で同僚の陸OBの後輩に駄目もとで尋ねたところ、陸自OBの山口浄秀氏（B17、初代中央即応集団司令官）ではないかとの回答を得ることができた。彼が偶然にも年賀状のやり取りをしているということで、ご住所を教えてくださいました。私と同じ千葉県柏市に在住ということを知り、

不思議な巡り合わせを感じた。不躰を承知で、「冬廣」を巡る経緯が記載されたJAAGA便りや関連する写真、カーショウ夫人とのメールのやり取りなどを同封して手紙を差し上げた所、直ぐに電話が



② Open to the public "FUYUHIRO" at the OSAFUNE Museum

きた。JAAGA関係者が日本刀返還を実現してくれたことに対する感謝の言葉を山口氏から直接頂くことができた。「冬廣」に纏わる最初の糸口であった山口氏にカーショウ大佐・夫人の願いが叶ったことを伝えることができたのも、数々の奇跡のような巡り合わせのお陰であり、「冬廣」を巡るキセキの物語の「続き」であると感じた。「冬廣」を故郷日本に戻したいという願いを共有したほぼ全ての関係者がその実現を確認できたことで、このキセキの物語にも一応の終止符が打たれたように思う。

そもそもこのキセキの物語は、日本に駐留していたご両親から譲り受けた日本刀が武人の魂であることを理解し、それに対する尊崇の念を持ち、その故郷に戻したいと願ったカーショウ大佐の願いが無ければ始まらなかった。又、日本の文化や日本刀が持つ深い意味合いを教え、返還の手掛かりをアドバイスしてくれた山口氏の存在が無ければ、



③ JAAGA presents Mr. Wright with an Iai sword at the reception

その後の話に繋がらなかったかもしれない。ご主人が無くなられた後も、その遺志を継いで返還の道を探り続けたカーショウ夫人の熱い願いが無ければ、AFA会長のライト氏までその願いは届かず、ライト氏が動くことはなかったであろう。また、ライト氏の依頼に誠心誠意応えようとした歴代の米国防衛駐在官の皆様の努力の積み重ねが無ければ、最後の頼みの綱としてJAAGA顧問の永岩氏にその願いが託されることは無かった。そしてJAAGAの事業としてこの返還プロジェクトを主導した福江氏（当時、JAAGA理事長）並びに池田理事を始めとする関係理事の真摯な取り組みが無ければ返還の道筋は見えなかった。そして今回紹介したキセキの物語の続きが出来たのは、ライト氏のお世話になった自衛隊関係者に対する尊敬と感謝の気持ちを伝えたいという願い、ライト氏訪日に当たって「冬廣」の現状を事前に確認させた丸茂会長の細やかな気配り、そしてなにより返還が実現した事実を山口氏にも伝えたいというカーショウ夫人の願いのお陰である。

「冬廣」を巡る長いキセキの物語を振り返ってみると、日米同盟の基盤をなす日米空軍種間の強い絆の力を感じる。何より、国防と言う崇高な使命にその命を捧げる軍人同士の尊敬と信頼で紡がれた人と人との絆や、軍人家族がその職業に敬意を持ち、利他の精神に基づく行いを貴ぶ気持ちが共有されていたことが空軍種間の繋がりやの根源にあるように思える。かつて干戈を交えた日米両国が戦後78年の苦難の歴史を乗り越え、今や世界で最も重要な同盟関係を築き上げてこれたのも、お互いの歴史や文化に対する相互理解のみならず、お互いを武人として尊敬し合い、一人一人が絆を紡ぐ努力を積み重ねてきたからに他ならない。目に見えない小さな思いや利他の心での行いの積み重ねが日米同盟の強固な礎の一部となっていることは間違いない。「冬廣」を巡るキセキの物語にほんの少し携わったものとして、日米同盟の更なる強化に寄与するためにJAAGAとAFAの絆を強めること、空自と米空軍・宇宙軍との更なる関係強化を後押しする活動を真摯に続けていきたいと改めて強く思った次第である。「冬廣」を巡るキセキの物語に込められた日米空軍種間の相手に対する敬意や信頼、更には利他の心が、現役の航空自衛隊員に継承され続けることを願って止まない。

（荒木（淳）理事記）

SPORTEX '23-B



JAAGA members, Koku-Jieitai and USAF service members enjoy SPORTEX on beautiful day



記録的な暖冬といわれながら、都心にも2度の積雪をもたらした冬が去り、桜の開花が待たれる3月20日(水)、多摩ヒルズゴルフコースにおいて「SPORTEX '23-B」が開催された。年度末の業務多忙な中ではあったが、現役空自隊員19名、米空軍関係者21名の参加を得て、JAAGA正会員24名と正会員ボランティア4名を合わせた総勢68名が参加した。開催数日前には、大きな「寒の戻り」で降雪も含む推移の激しい天気と予報されたが、参加者の心掛けの素晴らしさからか、後半こそ雲が増え、風が吹き出したものの、ほぼ理想的な条件下で18ホールを楽しむことができた。

開会式は、上ノ谷理事の軽妙な司会進行により進められ、丸茂会長とフリーデル第5空軍副司令官(Brig Gen Jesse J. Friedel, 5AF Deputy Commander)の力強くユーモア溢れる挨拶で参加者の気勢は大いに上がった。集合写真の撮影後、カートに乗り込んだ参加者は和やかに談笑しつつ、指定された各々のホールに向かった。7時のスタート・ホーンを合図に「ショットガン」形式で競技が開始され、各所で熱戦が繰り広げられた。

競技結果は、バーグマンさん(Mr. Dale Bergman, 5AF)が優勝(GRS 76 HDCP 6.0 NET 70.0)、リードさん(Lt Col Kevin Reed, 5AF)が準優勝(GRS 96 HDCP 25.2 NET 70.8)、窪田さん(航空総隊司令部)が第3位(GRS 100 HDCP 28.8 NET 71.2)であった。



Opening remarks with humor from President Marumo and Brig Gen Friedel

今回も「第5空軍」に因んだ飛び賞が設定され、「5」の倍数の順位のバックスさん(Lt Col Fred Backus, 5AF)、幡生さん(航空管制群)、森下さん(JAAGA正会員)、栗田さん(航空幕僚監部)、ラダンさん(Col Andrew Roddan, 374AW Commander)、小黑さん(航空幕僚監部)、糸賀さん(補給本部)、相澤さん(JAAGA正会員)、櫻井さん(第2輸送航空隊)、オカモトさん(Col Burt Okamoto, 5AF)、クマガヤさん(Mr. Toshitsugu Kumagaya, 515AMG)の11名に対し、前原事務局長から賞品が手渡された。またブービー賞はマケロイさん(MSgt Johnathan McElroy, 5AF)が受賞した。

丸茂会長賞は、ヘンドレンさん(Mr. Harley Hendren)に「Praying for recovery from the great earthquake at beginning of the year」の言葉と共に「輪島塗の写真立」が授与された。また、ラップ第5空軍司令官(Lt Gen Ricky N. Rupp, 5AF Commander)賞は、安全保障情勢が厳しい中、日米友好のため参加されたお礼として鈴木航空総隊司令官に、また5空軍に因んだ現役自衛官第5位の鈴木(敬)さん(第3補給処)、JAAGA会員第5位の渡辺(寛)さん(JAAGA正会員)に5AFロゴ入りTシャツが授与された。加えて今回は鈴木航空総隊司令官賞も用意され、司令官のラッキーナンバー「11」に因み、日米各々「11」位のランドルさん(Col Trigg Randall, 515AMG Commander)と太田(執筆)に「もっと練習してください」との司令官の言葉が添えられ、ゴルフボールが贈られた。事前準備の段階から、上ノ谷理事を中心に関係理事が集まり頭を突き合わせて検討を重ね、ビギナーの方々にも楽しんでもらえるよう、より多くの受賞者が出るラッキー賞を設定したり、会長から「最も打数の多かったプレーヤー」に会長賞を贈呈していただくなどの工夫をしてきたこと、

また関係各所に積極的に働きかけをした効果もあり、多くの参加者からは「たいへん楽しい交流の機会となった」とのコメントや「ビギナーで不安であったが、楽しく回れ参加して良かった」などのコメントも寄せられた。関係理事は、今後の SPORTEX の実施要領も含め更なる検討を加え、多くの参加者が集い、楽しく友好を深められる機会としてバージョンアップを図っていくと語った。

終わりに、ボランティアとしてプレー抜きで現場調整や臨機の対応、受付や会計、成績集計などを担当していただいた上ノ谷、井上、大岩、村田の4名の理事、また毎回最良の環境を提供していただいている多摩ヒルズゴルフコースの関係者の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

(太田理事記)



Volunteers



Winner !



2nd



3rd



JAAGA President Prize



Booby Prize



5AF Commander Prize



ADC Commander Prize



航空宇宙群紹介コーナー

Introduction of Space Operation Group

米宇宙コマンド主催の宇宙状況把握多国間演習及び A F A ウォーフェア・シンポジウムへの参加について

航空宇宙作戦群 3等空曹 玉井 千裕

【米宇宙コマンド主催の宇宙状況把握多国間演習】

2024年2月5日から16日の間、米国カリフォルニア州ヴァンデンバーグ宇宙軍基地において、米宇宙コマンド主催の宇宙状況把握多国間演習「グローバル・センチネル2024 キャップストーン」が行われた。本演習には25か国が参加し、日本からは宇宙作戦群の隊員6名が宇宙状況把握における運用能力の向上及び多国間連携の強化を図った。演習では、共通のシナリオとして示される様々な宇宙事象に対し、多国間でリスクの案出、ミッションの方針、観測データ及び解析結果共有等の協力により、脅威となる宇宙事象に連携して対処した。また、諸外国からの参加者と意見交換を実施し、運用態勢や解析方法等について



の参加であったが、年々規模を拡大し、今年は25か国約250名が参加した。航空自衛隊は2016年から参加し、今回が6回目の参加となる。このような大規模な多国間演習への参加を通じて築いた関係や得られた知見は重要な財産となる。今後も宇宙作戦群は同盟国・同志国との連携を強化し、宇宙空間の安定的利用に寄与していく。

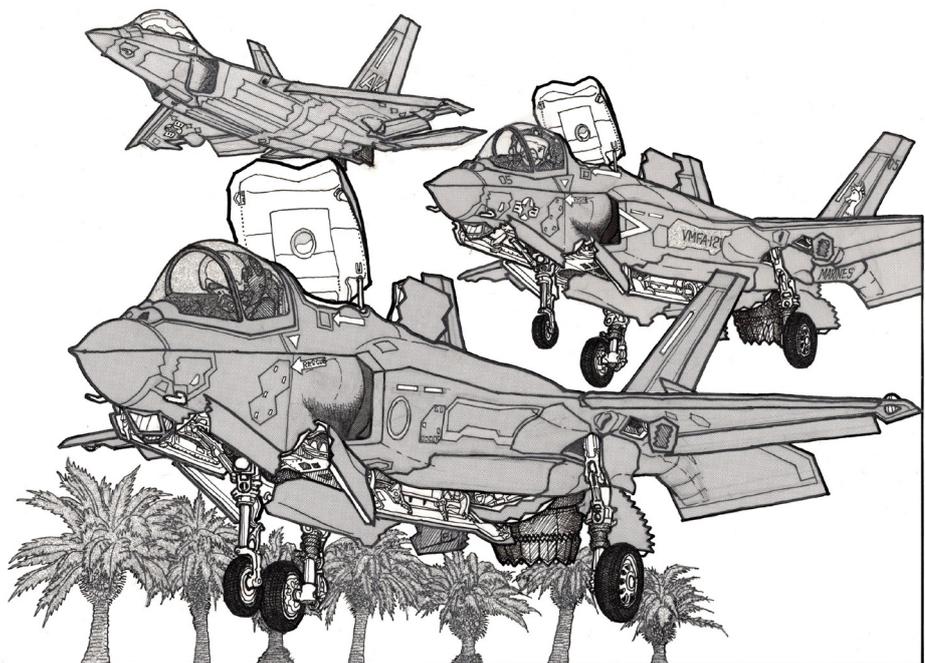


の知見を得ると共に、宇宙における連携を強化する重要性を相互に確認した。本演習は、2014年に開始された際には7か国



※富岡OBコメント

「新田原基地での『米軍再編に係る訓練移転』の共同訓練は、嘉手納の第18航空団及び岩国の第12海兵航空群が展開して実施しています。嘉手納のF-15の退役に伴うF-22の暫定配備、岩国のF-18からF-35Bへの換装、並びに本年度末の新田原でのF-35B臨時飛行隊の編成により、今後の共同訓練では最新鋭戦闘機同士、しかもステルスvsステルスという興味深い共同訓練が展開されるものと考えられます。ワクワクです。」



作：富岡OB

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

第一術科学校

ウォード・マシュー大尉

Capt Matthew W. Ward

皆様、初めまして浜松基地第1術科学校のウォード・マシュー大尉です。現在、交換幹部プログラムの整備幹部要員として働いています。令和4年の8月から令和7年の7月ごろまで勤務する予定です。日本の生活と自衛隊での勤務両方を、貴重な経験と感じて日々楽しんでいきます。

私の職種は航空機整備幹部です。米空軍基地の航空機、整備員、整備用資材及び検査日程等を管理します。これまで様々な機種に携わって



Capt Ward's family and St. Claus

きました。戦闘機、爆撃機、そして救難ヘリコプター部隊でも勤務しました。私が軍に入隊した理由は2つあります。一つ目は、自分の国に貢献したかったからです。そしてもう一つは、私自身が人間としてより成長したいと思ったからです。

現在、私には妻ともうすぐ1歳になる長男がいます。妻とは、嘉手納基地で勤務していた時に知り合いました。そして昨年、長男が誕生し幸せな毎日を送っています。妻は日本人なので、ぜひ長男にはアメリカと日本両方の国を好きになってもらい、日本とアメリカの関係がこれまで以上によくなることを願っています。また、今後も日本での勤務を引き続き希望していますので、日本の文化や日本語についてもたくさん勉強してほしいと思っています。



Military training experience

浜松基地での私の仕事は航空機整備幹部課程の学生に対する教育です。教育している内容は下記のとおりです。

1 米空軍について
米空軍の整備に関する概要を教育します。
日米共同で訓練する機会は増加しており、緊密に連携するため

にもお互いを理解することは重要です。その理解に役立つ内容を教育しています。

- (1) 組織と階級
- (2) 訓練制度
- (3) 部隊派遣要領
- (4) 航空機の飛行時間管理
- (5) 現在の戦略と課題

2 整備に係わる英語

目的は自然な英語が話せる

ようになることではありません。米空軍の会議や報告時に必要となる基本的なコミュニケーションを教育しています。特に、発音と重要な単語を教育しています。

(1) 海外訓練等における外国部隊との調整に必要な単語や表現

(2) 航空機現況の英語による報告要領

3 特別な課目

上記2つの教育に加えて、現在、新しい教育に取り組んでいます。これらの教育は米空軍の整備幹部が習得している知識の一つであり、組織としても重要視しています。米空軍の整備幹部に必要な知識をぜひ自衛隊にも付与したいと考えています。

(1) クリティカルシンキング（批判的思考法）

(2) TOC 理論（制約理論）

(3) 米空軍のリーダーシップ論

空自は米空軍の制度や規則を参考にしてきた歴史がありますが、組織の規模が違うため、全ての方式を米空軍と同じようにはできないと感じています。空自は、空自の組織規模に適合させた結果としての現在の制度方式だと考えますし、対領空侵犯措置任務は空自の方が熟練しており、我々が学ぶべきだと思います。

私がここでの勤務を終えるまでにやらなければならないことは、

- 1 空自と米空軍の協力関係を向上させる
- 2 米空軍と空自との調整役となる



A lecture at Air Officer Candidate School



Photo shoot with his students at 1st Technical School

3 米空軍が空自と共同任務をする際に貢献する
 4 米空軍の代表として空自からの信頼感を得る
 の4つです。残りの期間、これらの目標を達成するために、
 勤務にまい進するとともに、余暇の時間も大切にしたいと
 思います。家族と日本の文化や食事を楽しみ、まだ行った
 ことのない日本の素晴らしい場所を訪れたいと思います。

木蓮
 作：宇山 OB



航空自衛隊コーナー *From Koku-Jieitai*

「航空自衛隊創設70周年」 記念キャッチフレーズ及びロゴマークについて

○キャッチフレーズ 『大空とその先へ』

説明：航空宇宙自衛隊への進化及び爽やかでチャレンジ精神旺盛な航空自衛隊のイメージを連想させるシンプルで親しみやすいフレーズで構成。「大空」は、人類が空に思い描く、夢、希望といった好意的なイメージを強く印象付け、「その先へ」により引き続き挑戦を続けていく意思を表現した。

さらに、フレーズ全体を俯瞰すれば宇宙領域の暗喩となっており、我々、航空自衛隊の任務領域の拡大に対する決意を示している。

○ロゴマーク

航空自衛隊が守る新領域の「宇宙」を背景とし、線は、サイバー及び電磁波、各装備品との連結性を表現。その一つに60周年以降に装備化された装備品F-35を描き、この10年の航空自衛隊の進化を表現した。また、右上に伸びる線は、航空自衛隊がこの10年、国緊、在外邦人の輸送等各方面、各国で活躍していることを表現し、日本及び世界の平和に向けての連携を意図した。地図上の点は、空幕、総隊、支援集団、教育集団、開発集団、大臣直轄、補本を、また防衛力の根本的強化の七つの分野を表現。日本地図は航空自衛隊が守る国民を表すとともに、航空作戦の中核となる航空方面隊司令部所在地に四つの点を配置して、国民に寄り添い、我が国の空を守る決意を表現した。文字部分については、70の文字の中で、「7」は航空自衛

隊の編成及び防衛力の根本的強化の七つの分野を表し、「0」は任務領域が宇宙へ拡大する様子を地球と地球を取り囲む衛星、月、星空で表現した。70の右側の四つの点は、空（大きな点）と三つの新領域（宇宙、サイバー、電磁波）を表現。航空自衛隊の表記は、防衛交流等で認知度が向上している「KOKU JIEITAI」にすることにより、航空自衛隊のスマートさを印象付けることを意図している。

(航空自衛隊ホームページより)



LOGO of KOKU-JIEITAI
 70th Anniversary

「JAAGA だより」今昔物語

JAAGA DAYORI tales of the past and the present

1 「JAAGA だより」の変遷

筆者は、2006年（平成18年度）から2011年（平成23年度）までの5年間にわたり、広報理事として「JAAGA だより」の編集を担当しました。

その間に編集した「JAAGA だより」は、第29号（2006.7.28発行）から第41号（2011.7.28発行）までとなります。

当初は、7月末と11月末に発行しておりましたが、各種行事をタイムリーに寄稿することを勘案し、第36号から6月末と12月末に発行することになりました。また、「JAAGA だより」のカラー化については、経費が掛かり予算の制約もあることから、総会の後の号のみ、表紙裏表と最終紙裏表だけをカラーにしました。なお、その後の編集者各位のご尽力により、第46号から全面カラー化になっており、大変見応えのある「JAAGA だより」になっていて頼もしい限りです。

2 編集作業等

広報理事になった当初、特別な事務所もなかったことから、原稿校正は、防衛省厚生棟の喫茶店で行なっていました。先輩方の厳しい指導を受けながら、原稿を赤鉛筆で修正していったのを覚えています。つばさ会の事務所が出来てからは、その片隅を借り、肩身を狭くしながら校正作業を行なっていました。今思えばバカみたい話ですが、随分苦労したのだと振り返っています。校正を終えたあとは、防衛弘済会担当者にご尽力をいただき、最終的な手直し、そして、印刷への運びとなりました。この間、何度となく、防衛弘済会担当者と調整しました。なお、JAAGA 創立15周年において、防衛弘済会がその功績が認められ表彰されましたが、当時、大変嬉しく思った次第です。印刷を終えた「JAAGA だより」は、防衛弘済会からグランドヒル（GH）市ヶ谷における理事会の終了後に部屋に持ち込まれ、会長以下理事全員で、封筒詰め作業を行ないました。

封筒詰めした後の「JAAGA だより」は、GH 市ヶ谷から借りた手押しトロコに乗せ、GH 市ヶ谷から路上を経由して宅急便屋さんまで運びました。この宅急便屋さんは、以前から「JAAGA だより」の発行業務を長期間にわたり請け負って頂きましたが、担当者が変わった時に、発行部数が多く請け負えないと断わられました。しかしながら、他の業者が近隣にないことから、バーコードシール貼りは我々がやるから何とか請負って頂きたいと執拗にお願いし、ようやく請負った頂くことができました。

その内に、近隣に他の業者が見つかり、GH 市ヶ谷まで取りに来ていただけることになって、大いに安心した次第です。

3 当時の「JAAGA だより」の白黒写真の原板

当時担当していた「JAAGA だより」は、ほとんどが白黒でしたが、

その原版となるカラー写真をたまたま所持していましたので、その一部をここに掲載します（キャプションは、当時のままです）。国旗、室内装飾、奥様方の服装、軍人のお出で立ち等、カラーでしか味わえないものもあり、現在の「JAAGA だより」のようなカラー版が編集されていることは、そういった観点からも本当に良かったと思っている次第です。

当時の「JAAGA だより」につきましては、JAAGA ホームページの「JAAGA20年の歩み」欄の「JAAGA だより」を参照頂きますようよろしくお願いいたします。

JAAGA 正会員 源外志明
（元 JAAGA 広報理事）



YOKOTA Air Force Ball
「JAAGA DAYORI No.30
(2006.7.25)」



YOKOTA NEW Year's
Party 「JAAGA DAYORI
No.31 (2007.3.29)」



YOKOTA Open House
「JAAGA DAYORI No.30
(2006.7.25)」



YOKOTA Open House
「JAAGA DAYORI No.40
(2011.6.23)」

米空軍コーナー

From 5th Air Force

Air Force leaders focus on ACE during Kadena visit

<https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/3740813/air-force-leaders-focus-on-ace-during-kadena-visit/>

フランク・ケンドール（Secretary of the Air Force, Frank Kendall）空軍長官、デービッド・オールヴィン（Chief of Staff of the Air Force, Gen David Allvin）空軍参謀総長、デービッド・フロシ（Chief Master Sergeant of the Air Force David Flosi）空軍最先任上級曹長は4月6日、嘉手納基地を訪れ、チーム嘉手納のユニークな能力と大国間競争に向けた再最適化の取り組みを視察した。

「航空優勢、空中給油、空中警戒管制、捜索救難、特殊作戦。チーム嘉手納はそのすべてをこなしている。嘉手納チームが同盟国やパートナーとともに、地域の安全保障を確保するためにどのように決定的な航空戦力を投射しているのか、直接聞くことができ感激した。」

今回の訪問は、嘉手納がインフラを近代化し、現在および将来のACE（Agile Combat Employment：迅速機敏な戦闘展開）をこの地域で効果的に実施するために、即戦力となる隊員の育成に注力しなければならない時期に行われた。

嘉手納基地は太平洋の要として、日本の防衛と自由で開かれたインド太平洋を確保するための極めて重要な基地である。嘉手納基地に滞在中、上級指導者たちは基地の重要課題

について議論し、飛行隊レベルのACE演習「ショウガン・シールド」を視察し、チーム嘉手納のメンバーの優れたパフォーマンスを評価した。

さらに、オールヴィンとフロシは全隊員に、可能な

限りの準備と能力を身につけるよう呼びかけた。

「今こそ、私たちは自由になり、前進し、リードしていかなければならない。「将来の戦いにおいて、空軍と宇宙軍にはより多くのことが要求されるだろう。」

フロシはさらに、ペース配分の課題についてこう続けた。「中国は、我々のハードウェアやテクノロジーを恐れていない。フロシは言った。「彼らは我々の隊員を恐れている。ACEと即応性に焦点を当てることより、主要指導者たちは、安定と同盟国およびパートナーの安全に対するあらゆる脅威に適応するための革新性と創造性の重要性を強調した。インド太平洋地域における軍事近代化は、国防総省の最優先課題である。今回の訪問では、基地の多様な任務と進化する能力を紹介するとともに、現在および将来の任務の要求に応えるための近代的なインフラの必要性を強調した。」

嘉手納基地の継続的な近代化努力は、即戦力となる隊員を原動力としており、いつでもどこでも脅威と正面から向き合う米国の決意を示す紛れもない例となっている。（浅井理事仮訳）



Raptors arrive to the Keystone of the Pacific

<https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/3740811/raptors-arrive-to-the-keystone-of-the-pacific/>

第 199 戦闘飛行隊及び第 19 戦闘飛行隊の F-22A が 2024 年 3 月 28 日嘉手納基地に到着した。太平洋の要に配備されている間、第 19 戦闘飛行隊と第 19 戦闘飛行隊のラプターは、嘉手納基地に増派され駐留する重装備機、偵察機、第 4 世代戦闘機、第 5 世代戦闘機と連携し、この地域における継続的かつ安定した戦闘機能力を確保する。(浅井理事仮訳)



マルティネス名誉会員来日 Martinez, the honorary member of JAAGA, come to Japan

JAAGA 名誉会員であるマルチネス元在日米軍司令官兼第 5 空軍司令官 (Lt Gen (Ret.) Jerry P. Martinez, Former U. S. Forces Japan, and Fifth Air Force Commander) は、自身がナビゲーターを務めるドキュメンタリー「DEFENDING JAPAN Season2」(ヒストリーチャンネル) ジャパンプレミアの為令和 6 年 2 月 23 日から 28 日の間、急遽来日した。

「DEFENDING JAPAN」全 7 話(ヒストリーチャンネル)は、2018 年に公開された今日の日本が直面する新たな脅威と国家安全保障の実情に、アメリカの視点から迫るといふ、全く新しい国防ドキュメンタリーとして製作され、アマゾン、Hulu 等でも視聴することができる作品で、全世界に向けて配信されている。なんとハリウッドでもドキュメンタリー部門で上映されたというから驚きの作品である。非常に好評を博したことから 2023 年に Season 2 が製作され始めており、企画、撮影ともに現在進行中となっている。

今回、平田英俊顧問に引き続き武藤茂樹副理事長に本作品への出演依頼が来たことから、来日の多忙な中、旧交を温めることになった。2 月 27 日ホテルニューサンノー(東京都港区南麻布)で行われた撮影の冒頭、にこやかな笑顔で迎えてくれたマルチネス退役中将与武藤副理事長は、さながら現役時代に戻ったように打ち解けた対談となった。撮影は順調に進み、その後に行われたレセプションでも終始和やかな雰囲気の中、懇談は進み、最後にマルチネス中将の日本愛にあふれたスピーチで締めくくられた。

武藤副理事長からは、丸茂会長に代わって歓迎の意が述べられたことに続き、マルチネス退役中將からは、会長をはじめとした JAAGA メンバーに対する感謝の言葉、在任中の日本での思い出、本作品に込めた思い、来日して日本で再発見したことなどが述べられ、米国、特に自宅のあるラスベガスに是非ともお越しいただきたいとの歓迎の意が表せられた。

これまでの JAAGA 名誉会員の活動とはちょっと違っていても、エンターテインメントの世界で日本を後押ししてくれているマルチネス退役中將が、今後とも日米両国の親善の懸け橋としてご活躍されることを期待している。

(川波理事記)



↑ Lt Gen (Ret.) Muto and
Lt Gen (Ret.) Martinez

→ “DEFENDING JAPAN S2”



ホリデーレセプションに参加 JAAGA members participate in A Holiday Reception

在日米空軍 / 5 空軍 横田基地
USFJ / 5th AF at Yokota AB in Jan.20 '24

令和 6 年 1 月 20 日（土）18 時から米軍横田基地と基地周辺自治体の友好団体である 7 クラブとの合同新年会が 4 年ぶりに横田基地内下士官クラブにおいて催され、JAAGA からは前原理事長、川口理事、村田理事、朝倉理事が参加した。



“TEJIME”, Closing ceremony of the 7 club

日米両国の国旗入場と両国歌の独唱に続いて、7 クラブ（あきる野、福生、羽村、武蔵村山、青梅、昭島、瑞穂）を代表して年度幹事のあきる野・横田交流クラブ会長の天野正明様の御挨拶により開会された。

最初に米空軍横田基地司令の第 374 空輸航空団司令官アンドリュー L. ラダン大佐（Col Andrew L. Roddan）より元旦に発生した能登半島地震による被災者と昨年オスプレイ事故による殉職者への哀悼の辞と長年にわたり異文化を理解し友好な関係を築いてくれた 7 つの友好クラブへの感謝の言葉が述べられた。続いて来賓代表挨拶として、あきる野市長の中嶋博幸様より 4 年ぶりに新年会を催すことができることへの感謝のお言葉があった。その後盛大に鏡開きがあり歓談に入り、舞台ではオールドアメリカン・ファンを魅了する Square Dance パフォーマンスが花を添えた。最後に 7 クラブ独特の「7 本手締め 7th Closing Handclaps」により新年会は閉会となった。

（朝倉理事記）

第 18 航空団 嘉手納基地
18th Wing at Kadena AB in Dec.16 '23



(from left) Director Murata, Mr Masaaki Amano, Chief Director Maehara, Director Kawaguchi and Asakura

令和 5 年 12 月 16 日（土）嘉手納基地内ロッカー NCO クラブにおいて、第 18 航空団司令官ニコラス・エヴァンス大佐 (Col Nicholas Evans) 夫妻主催によるウィンターソーシャルが開催され、JAAGA 沖縄支部丸野支部長夫妻及び相原事務局長が出席した。

懇親会には、南西航空方面隊司令官谷嶋空将夫妻、第 9 航空団司令鈴木空将補の他、外務省沖縄事務所宮川大使、沖縄防衛局伊藤局長、桑江沖縄市長、當山嘉手納町長、渡久地北谷町長等の周辺自治体関係者と共に、地元企業各社代表者等多数の関係者が参加した。

在沖米軍関係者は、第 3 海兵遠征軍司令官ジェームス・ビアマン中将 (Lt Gen James W. Bierman Jr.)、在日米軍沖縄調整事務所長ジン・パーク陸軍大佐 (Col Jin Park)、沖縄艦隊活動司令官パトリック・ジーカン大佐 (Capt Patrick Dziekan)、第 1 海兵航空団司令官エリック・オースティン少将 (Maj Gen Eric E. Austin)、米海兵太平洋基地司令ステフィン・リズウスキー少将 (Maj Gen Stephen E. Liszewski) が出席した。その他第 18 航空団最先任上級曹長夫妻や隷下各群司令官等が参加するなか、空自からは南西航空方面隊准曹士先任上原准尉、第 9 航空団准曹士先任屋嘉比准尉が参加し、華やいだウィン



Col Evans and his wife and Maruno branch manager and his wife

ターソーシャルを満喫していた。司令官挨拶でエヴァンス大佐は、日本語を交え日米の友好を深めると共に大変有意義な交流が出



Winter social with great success

来たことを大変嬉しく思われ、参加者全人に対して感謝の言葉を贈られた。参加者は、NCO クラブ提供の大変豪華な各種フードに大いに舌鼓を打つとともに、華やかに飾られたクリスマスツリーをバックに記念撮影に興じ、一足早いクリスマス気分を味わいウィンターソーシャルを楽しんでいた。（相原沖縄事務局長記）

ラダン大佐 (Col Andrew L. Roddan) 夫妻主催によるホリデー・ソーシャルが開催された。ドレスコードは、フェスティブ/スマートカジュアルと指定され、各参加者は楽しい午後



Small cute ballerinas

のひと時を過ごした。ご招待により JAAGA から前原理事長、菊田、福永、村田、朝倉理事が参加させて頂いた。

主催者挨拶としてラダン大佐は「この大切なホリデーシーズンに皆様をお迎えできますことを大変光栄に思います。ホリデーは私たちの人生を共に過ごす友人や家族と祝うための期間です。この大切な時間は一体感、寛容さ、感謝を通じて私たちに団結力をもたらしてくれます。」と挨拶された。今年も特別ゲストとして基地内のバレエ教室に通う小さなプリマたちが迎えられ、かわいいくるみ割り人形の演技がホリデー・ソーシャルに花を添えた。ラダン大佐はプリマ一人ひとりに赤い花を手渡し素敵にダンスに感謝を述べられた。

基地周辺地域の市長、市議会議長をはじめ多くの招待者と基地関係者とのパーティ形式での再会を通じて、地域の皆様との交流が日米間の強固な団結ためには重要であることを実感した。（朝倉理事記）

第 374 空輸航空団 横田基地

374th AW at Yokota AB in Nov.18 '23



Commemorative photo with Col Radan and his wife

令和 5 年 11 月 18 日 (土曜日) 午後 1 時から横田基地内将校クラブにおいて第 374 空輸航空団司令官 アン ドリュー L.

新入会員紹介

正会員 (8 名)

氏名	住所	氏名	住所	氏名	住所
徳重 勇一	埼玉県越谷市	西谷 浩一	東京都西東京市	上境 賢己	千葉県柏市
有松 勝行	東京都府中市	高橋 秀雄	埼玉県入間市	中田 祥史	東京都文京区

個人賛助会員 (12 名)

吉川かおり	兵庫県芦屋市	濱田 光江	福岡県福岡市	遠山 和行	千葉県千葉市
古賀 京子	福岡県久留米市	奥岡 久幸	兵庫県西宮市	池田 幸浩	埼玉県秩父市
多賀谷 通	福岡県飯塚市	三縄さほり	神奈川県横浜市	出口 雅敏	神奈川県鎌倉市
中田 智子	東京都新宿区	佐々木 敏子	埼玉県加須市	遠藤 由美	埼玉県上尾市

法人賛助会員 (2 社)

法人名	住所	代表者	法人名	住所	代表者
株式会社フジワラ	愛知県北名古屋	松島 雄一郎	藤倉航装株式会社	東京都品川区	長井 弘

令和6年度JAAGA事業計画													
事業項目/実施時期		1/四			2/四			3/四			4/四		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
日米隊員の激励等	日米共同訓練参加隊員の激励							コープノース					
	日米隊員の表彰(JAAGA AWARD 2024)												
	日米隊員の交流活動(日米相互特技訓練)等激励												
米空軍軍人の日本研修等支援	防大留学米空軍士官学校学生の研修支援												
	スペシャル・オリンピックスの支援							横田、三沢、嘉手納					
JAAGAと航空自衛隊・米空軍との交流	SPORTEX24												
	指揮官交代行事等への出席												
	訪米事業							訪米			成果等報告会		
	在日米空軍各基地との連携の強化												
	米空軍慶弔への対応												
	関係団体との交流(JANAFA、横田基地7クラブ)	JANAFA						JANAFA			横田基地7クラブ		
広報及び広報協力	日米要人等の講演	5/14									空幕部長等		
	米空軍基地等の研修							横田			三沢		
	日米安保等に関する広報活動(米空軍広報記事の会報掲載)												
	会報の発行、配布												
	一般広報(HP運営、パンフレット作成、グッズ贈呈)												
総会	5/14												
運営管理	会勢拡大等(会員管理、会勢拡大)												
	支部との連携												
	事務所の運営と備品等の整備												
	会員名簿の作成、配布												
	役員会(★)及び理事会(☆)	☆	☆	★	☆	★	☆	☆	★	☆	☆	★	
会計監査及び物品監査	(R7. 4)												
その他	創立30周年(令和8年)記念行事のための経費積立												

令和6年度JAAGA役員

職名	氏名	(青：新任 緑：役職変更)	
会長	丸茂吉成		
副会長	前原弘昭、荒木淳一、井筒俊司		
監事	小野賀三、深澤英一郎		
理事	理事長	武藤茂樹	
	副理事長	増子 豊	
	企画	山田真史、増子 豊(兼)、上ノ谷 寛、引田 淳、菊田 哲	
	総務	深瀬尚久、井上浩秀、三谷直人、長田国男、山倉幸也(兼)、金古真一、荒木哲哉、島津貴治、西谷浩一、高橋秀雄	
	渉外	川口泰志郎、藤田信之、村田圭史、朝倉讓、岩崎仁彦、川波清明	
	会員	今瀬信之、西村弘文、山倉幸也、野澤隆一	
	広報	浅井玲、池田五十二、太田徹、菅原政弘	
	財務	平元和哉、大岩卓弥、宮本裕徳、上境賢己	
支部役員	支部長	池添孝史(三沢)	丸野礼治(沖縄)
	支部事務局長	山本親男(三沢)	相原弘介(沖縄)

JAAGA 退任役員

◆これまでの多大なるご貢献に会員一同感謝致します！

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
副会長	福江広明、上田智元、小野賀三	監事	内山隆弘、山本祐一	理事	大浦弘容、荒木文博、福永充史、吉川礼史、竹内由則(物故)

賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400 ～ 2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしております！

【法人会員の皆様】 31 社

株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、株式会社エクシオテック、沖電気工業株式会社、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、富士通株式会社、藤倉航装株式会社、株式会社フジワラ、渕上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレジジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキードマーティン グローバル インコーポレーテッド

【団体賛助会員の皆様】 2 団体

ハイフライト友の会、三沢市防衛協会

【個人賛助会員の皆様】 108 名

投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、お蔭様で令和 5 年 7 月で創立 27 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。「JAAGA だより」も、JAAGA 活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様（会員に限らず現役隊員の皆様）からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見や感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

【連絡先】（郵便） 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号

ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 広報係

（メール） jaagaKH222@outlook.jp

JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様の投稿を募集しています。投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」（男性にはタイピン、女性にはピンブローチ）を謹呈させていただきます。

JAAGA 広報係



会員募集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 8 名、個人賛助会員 12 名、法人賛助会員 2 社の合計 22 名（社）の入会を得ることができました。
- 令和 6 年 5 月 1 日現在、正会員数 258 名、個人賛助会員数 108 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 31 社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊の OB

賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】

郵 便：〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 会員係

メール：membership@jaaga.jp

編集後記

◇編集作業（編集長）◇初めて編集長となって今次 6 6 号の編集を主導しました。途中、編集パソコンの故障により新規パソコン購入もありドタバタしましたが、やっと入稿できて感慨ひとしおでした。◇年々混んとしていく世界情勢にあって、自国防衛について深く考えさせられています。各記事に触れていくにしたがって日米同盟の大切さを確信しています。◇日本刀返還の「キセキ」に続編があったとは驚きでした！前回の日本刀返還に携わった者として大変嬉しく、改めて「念ずれば花開く」の詩文を思い出しました。“祈るだけではなく、一生懸命努力すればいつか道は開ける”ということをモチベーションにして編集頑張っていきます！◇最後に広報理事でだより編集にも携わった竹内理事が急逝され広報理事一同衝撃を受けておりますが、故人のご冥福を祈るとともに、広報理事一同故人生前の献身的な理事活動に倣って邁進してまいります。今後ともご支援よろしくお祈りいたします。



作：山本康正 OB

◆新型コロナウイルスが感染法上の 5 類に移行して 1 年たちました。巷は活気を取り戻し、インバウンドで溢れ、少し違う日常が戻ってきました。この間も変わらず JAAGA だよりを発行し続けられたことへの感謝とほんの少しの誇りを感じるこの頃です。(A)

◆『JAAGA だより』今昔物語』には感激しました！当時の苦勞に初めて触れ先人が切り拓いた道を現在歩んでいることを再認識しました。更に開拓していく所存です！（I）

◆航空自衛隊は 70 周年を迎え、いよいよ「航空宇宙自衛隊」へ進化することに… 「見上げて美しさに感動する」宇宙空間が、「働く場」になるとは感慨もひとしおです。(O)

◆都内や観光地などで見かける外国人観光客が増えていますが、折を見て話しかけると大抵喜んでレスポンスしてくれます。日本のイメージ向上のチャンスかもしれませんね。(S)

編集担当（広報理事）：浅井玲、池田五十二、太田徹、菅原政弘

JAAGA だよりは、ホームページからもご覧いただけます（創刊号から第 49 号までは「20 年の歩み」に掲載）。

（JAAGA ホームページ：http://www.jaaga.jp/）